

平成十一年三月

立正大学図書館蔵

明版仏典解題目録

立正大学図書館



平成十一年三月

立正大学図書館蔵

明版仏典解題目録

立正大学図書館

巻頭言

中国明代の南京報恩寺版大藏經いわゆる南藏が、立正大学図書館に所蔵されていることが判明して以来、図書館員等の努力によって綿密な実態調査がおこなわれ、その成果を平成元（一九八九）年二月に『立正大学図書館所蔵 明代南藏目録』として刊行いたしました。わが国では現存の稀な、学術上えがたい印刷大藏經であったこともあり、広く斯界の注目するところとなったことは幸いでありました。

さて、この南藏の一群とともに、本館には明代の单刻仏典八十帖ほどが所蔵されております。これら单刻の明版仏典（一部写本と清版を含む）は、本来南藏とともに本館に寄贈されたものであります。当初南藏とともに調査および目録等の刊行を期しましたが、諸般の事情から実現しませんでした。

南藏の調査・整理・補修等の作業がひとまず終了したあと、平成六（一九九四）年からこれら明版单刻仏典の調査・整理にも着手し、このほどようやく解題目録刊行の運びとなりました。この目録は、貴重な明代の仏典の実態を明らかにするため、多方面からの周到な分析と検討が試みられており、学術的にも立派な価値を有するものと確信します。

いうまでもなく図書館は、大学における知的情報の受信・発信の場であります。立正大学図書館所蔵の資料情報が、こうして幾度となく対外的に発信されますことは、本館の蔵書価値を広く内外に示すことでもあり、斯界の発展にわずかながらも寄与するものと信じてやみません。

平成十一年三月一日

立正大学図書館長 生駒 幸運

序

いつしか忘れられ書庫の一隅に眠っていた明代南蔵——明代から清代初頭にかけて南京において印造されていた大蔵経——の一部、二六八部五五八巻が立正大学図書館に所蔵されていることを、野沢佳美氏（現立正大学文学部史学科助手）が確認し、その重要性の指摘がなされてから十余年が経過した。その所在が確認されるや、本館としては傷みの激しいものから裏打や帙の作製などの補修事業とともに、あわせて整理とその調査をおこなってきた。その結果、本館所蔵の明代南蔵は、明末の印造であり、しかも一割にも満たない現存数とはいえ、わが国に現存するまとまった南蔵としてはいまのところ唯一の遺存例であることが明らかとなり、改めてその重要性についての認識を深めることとなった。

かかる事実を踏まえ、その内容を広く知らしめることこそ、仏教学界をはじめそれぞれの分野の研究者に寄与すること大なるものがあるとの認識に立ち、何らかの形で公表することが所蔵者としての使命であり責任でもあるとの判断のもとに、平成元年に第一冊目『立正大学図書館所蔵 明代南蔵目録』、第二冊目『立正大学図書館所蔵 明代南蔵本古尊宿語録』（影印版）として刊行した。

爾来十余年の歳月を経たが、実は本館には南蔵とともに寄託された他の明版単刻仏典が八十数帖保管されている。当初、これら仏典もしかるべく処置をとりたいたいと念願していたが、諸般の事情で果たせなかった。しかしながら所蔵者の責務を痛感し、これら単刻仏典も長期保存に耐えられるよう補修を施すとともに、再度野沢氏にそれら仏典の調査をお願いした。その結果、これら単刻仏典も、わが国のみならず中国においても、いまのところ所在が明らかにされていないテキストが多数あり、なかにはこれまでその内容すら知られていない仏典も含まれていることが判明した。かかる重要性に鑑み、これら明版単刻仏典（一部写本と清版を含む）の解題目録を作成し、第三冊目として公刊する運びとなった。

本目録においてとくに注意されるのは、「主要仏典解説」にも述べられているように、永らく佚書とされてきた『華嚴法界観通玄記』（三巻中、下巻は前表紙のみ存）が確認されたことである。ちなみに本仏典の宋版の一部が高山寺に遺存するが、惜しむらくは現在、そのほとんどが散佚してしまっている。こうした貴重かつ重要性に基づき、本館に現存する『華嚴法界観通玄記』の全てを写真版とし

て本目録末に収録した次第である。

本目録が、多くの研究者の一助となり、斯界の研究発展に寄与することができれば、これに優る喜びはなく、多くの研究者をはじめとした関係者各位の利用を期待したい。

平成十一年三月一日

立正大学図書館司書部長

三村 欣市

目次

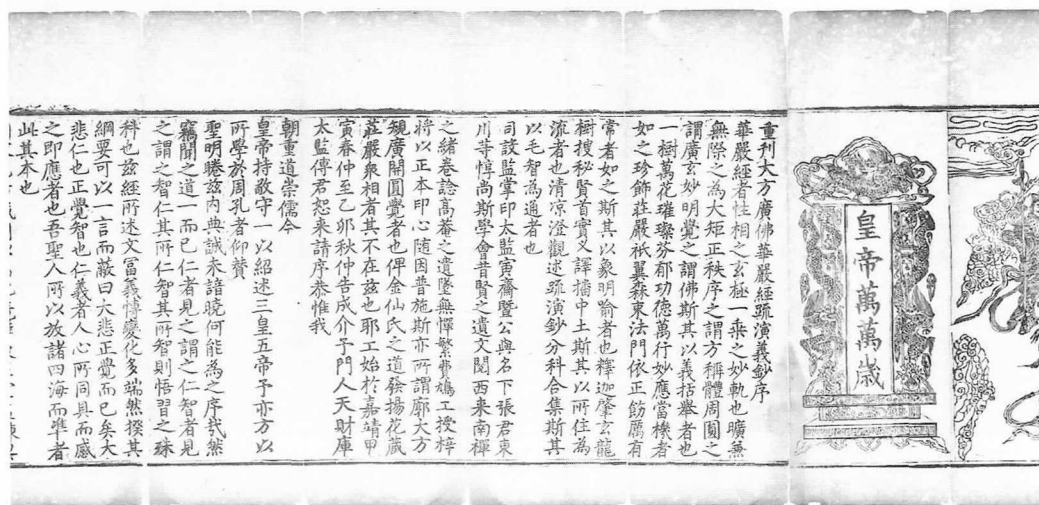
影印 仏典 の部	解 説 の 部	書 誌 の 部	書 影 の 部	凡 例	目 次	序	卷 頭 言
.....
55	39	17	7	6	5	3	1

凡例

- 一 本目録は、立正大学図書館所蔵の明代南京報恩寺版大藏經、すなわち南藏とともに本館に寄贈された明代の単刻印刷仏典の解題目録である。ただし、一部書写仏典および清代の印刷仏典をも含んでいる。
- 一 本目録に収録した仏典は、現在裏打補修などが加えられているが、書誌データは補修以前のそれに基づいている。
- 一 各仏典の書誌において、書名は原則的に内題に依り、その他の各項目は左記の規定によって、該当項目がある場合のみ著録した。
 - 【撰者】は、巻首にしるされた所属・姓名などを著録した。
 - 【外題】は、前表紙題箋にしるされた仏典名などを著録した。
 - 【版式】は、法量（縦×横）、各紙折数・字詰・界高、および紙数からなる。
 - 【扉絵】は、巻首・末に付せられた図・木牌・木記・韋駄天像、およびその箇所を著録した。
 - 【版心】は、各紙の折り目にしるされた仏典名や巻数・紙数を著録した。
 - 【序跋】は、巻首・末に付せられた序文や跋文の題名を収録し、あわせて撰者および掲載箇所も著録した。
 - 【刊記】は、いわゆる開板刊記および施財刊記をそのまま収録し、改行は／で示した。ただし、『楞伽阿跋多羅寶經註解』（八卷）のみ、各巻毎紙に施財署名がしるされていることから、詳細は省略した。
 - 【印記】は、判読可能なもののみ印文・寸法（縦×横）で示した。
 - 【刻工】は、版心・料紙の継ぎ目などに確認された判読可能なもののみ著録した。
 - 【備考】は、各仏典につき重要と思われる情報を順不同で著録した。
- 一 「主要仏典解説」は、本目録収録の明版仏典中、とくに重要と思われるもののみにつき解説を加えた。
- 一 本目録末に影印した『華嚴法界觀通玄記』（三巻、うち巻下は前表紙のみ存）は、従来佚書とされてきた仏典で、その重要性に鑑みて、現存する巻上および巻中の全部、巻下の前表紙を写真収録し、斯界の研究発展に資することとした。

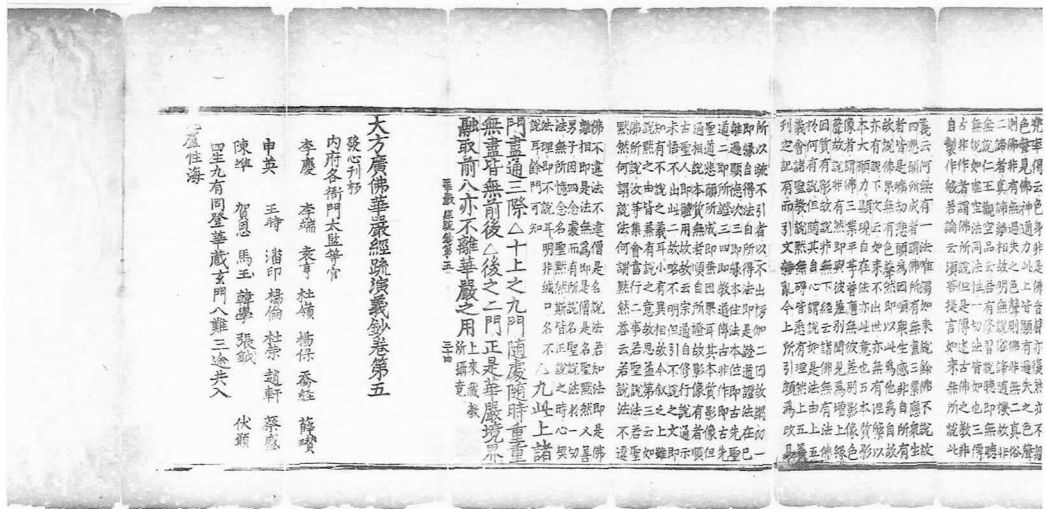


1. 大方廣佛華嚴經疏序演義鈔卷第一卷首 (一)

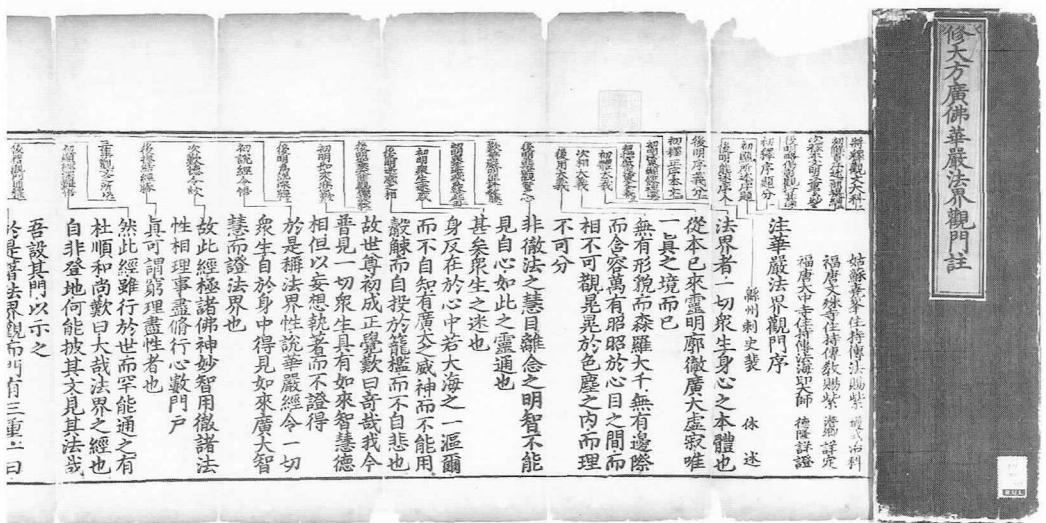


2. 同上(二)

重刊大方廣佛華嚴經疏演義鈔序
 華嚴經者性相之玄極一乘之妙軌也曠無
 無際之為大矩正秩序之謂方稱體周圓之
 謂廣玄妙明覺之謂佛斯其以義括舉者也
 一樹萬花璀璨芬那功德萬行妙應當機者
 如之珍飾莊嚴祇翼森東法門依正飭厲有
 常者如之斯其以象明喻者也禪迦摩玄龍
 樹授秘賢寶寶又譯攝中土斯其以所住為
 派者也清涼澄觀述疏演鈔分科合集斯其
 以毛智為通者也
 司設監掌印太監實齋暨公與名下張君東
 川寺博尚斯學會普賢之遺文閱西來南禪
 之緒卷誇高蒼之遺墜無憚繁費鳩工授梓
 將以正本印心隨因普施斯亦所謂廓大方
 觀廣開圓覺者也俾金仙氏之道發揚花藏
 莊嚴衆相者其在茲也耶工始於嘉靖甲
 寅春仲至乙卯秋仲告成介子門人天財庫
 太監傅君起來請序恭惟我
 朝重道崇儒令
 皇帝持敬守一以紹述三皇五帝予亦方以
 所學於周孔者仰贊
 聖明瞻茲內典誠未諳曉何能為之序哉然
 竊聞之道一而已仁者見之謂之仁智者見
 之謂之智仁其所仁智其所智則悟習之殊
 科也茲經所述文富義博變化多端熟探其
 綱要可以一言而蔽曰大悲正覺而已矣大
 悲仁也正覺智也仁義者人心所同具而感
 之即應者也吾聖人所以放諸四海而準者
 此其本也



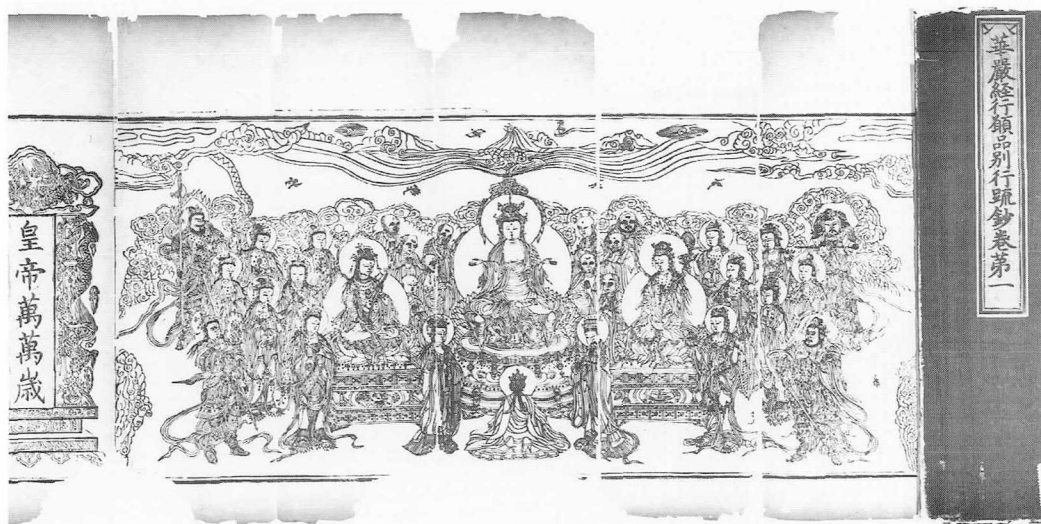
3. 同 卷第五卷末



4. 注法界觀門卷首



7. 同 卷下之二卷末



8. 大方廣弘華嚴經普賢行願品別行疏鈔卷第一卷首 (一)



11. 同前(二)



12. 楞伽阿跋多羅寶經註解卷第一卷首(一)



重刊楞伽阿跋多羅寶經註解序

昔

釋迦世尊居南海濱楞伽山頂時大慧菩薩首衆啓發對揚道妙初以百八句詔諸世尊既已領答乃曰是百八句先佛所說汝

及諸菩薩應當備學至下廣伸別問別答莫不破外計之偏邪顯自覺之聖智了妄無性即妄顯真此楞伽阿跋多羅寶經所以說也其說大約有四謂五法三自性八識二無我即此經之綱目建義之關鍵與

一百八句數雖廣略義實相符一經大旨舉在是矣且一經總名佛語心品者心名多種今之所明即如來藏自性清淨第一義心此心至中至極性一切心妙一切法建立一切義為一切法所歸趣故曰此是

三世諸佛性第一義心又曰大乘諸度門諸佛心第一普達磨祖師嘗示人曰楞伽四卷可以印心者其在是歟洪惟我太祖高皇帝道合乾坤明日月政治隆於三代德化敷於萬方乃眷佛乘允為妙法特註此經頒行天下逮我

13. 同 前 (二)

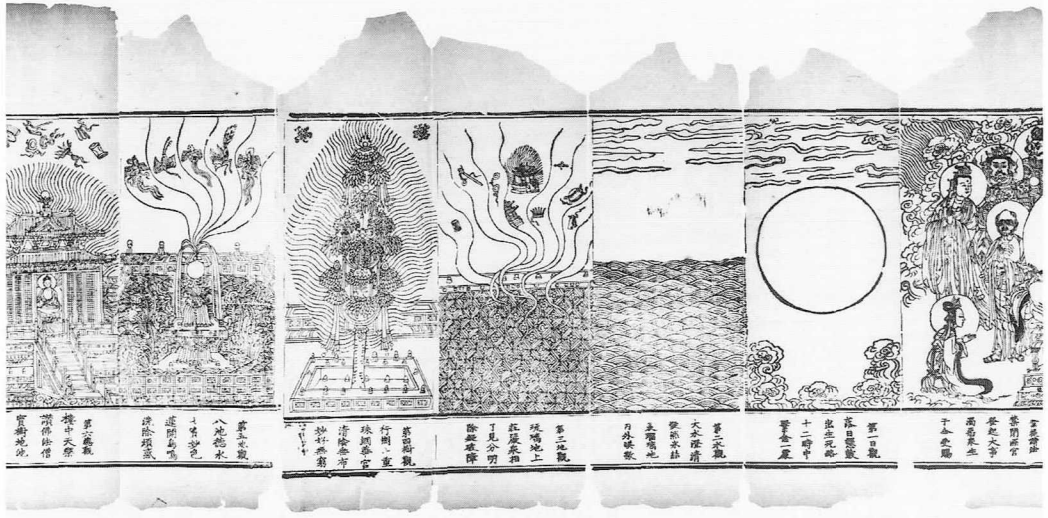
心既無無亦無湛然常寂是則楞伽經之本占也然則不幾於空乎殊不知空則極虛虛則善應惟其善應未嘗不應若未嘗應蓋動亦靜也云耳若是何起之有何滅之有柳何種種起滅種種如如之有故曰動而無靜靜而無動物也動而無動靜

而無靜神也物則不通神妙萬物否則以稿木死灰為如如則亦安取於覺耶嗚呼畢竟如何獨抱玉臺明月鏡任他好醜萬般來

金臺廣濟寺此立能獨同
御馬監太監徐仁等統一方緇素命工
刊梓流通以此功德上報
四思下資三有法界衆生同圓種智
嘉靖壬戌孟夏吉日
重刊



14. 同 卷第八卷末



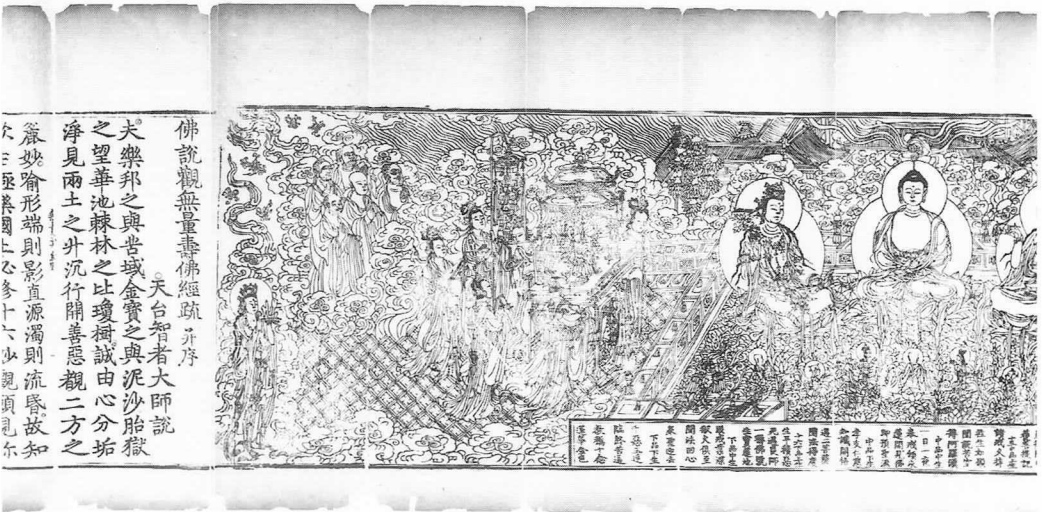
15. 仏説観無量寿仏經疏卷上卷首扉絵（一）



16. 同 扉絵（二）



17. 同 扉絵 (三)



18. 同 扉絵 (四)

大方広仏華嚴經疏科文卷第一

一卷一帖

【撰者】清涼山大華嚴寺沙門澄觀科定

【外題】「大方広仏華嚴經疏鈔科文第一」

【版式】三三・一×一〇・七糎、一紙五折、一折六行、界高二四・〇糎、二一紙

【版心】「花嚴科卷一 (紙數)」

【序跋】「大方広仏華嚴經疏鈔序科文」(卷首)

【刊記】「大明嘉靖三十三(一五五四)年歲次甲寅吉旦重刊」(卷末)

【印記】「通明ノ之印」(朱印、陽刻、一・七×一・五糎)「慧像ノ図書」(朱印、陰刻、一・八×一・五糎)

【刻工】料紙継ぎ目に「玄」「□付」「耿」とあり。

大方広仏華嚴經疏序演義鈔

卷第一、五、七、九

五卷五帖

【撰者】清涼山大華嚴寺沙門澄觀撰述

【外題】「大方広仏華嚴經疏鈔卷第(幾) 玄談」

【版式】三三・二×一〇・八糎、一紙五折、一折六行十七字詰、上下二重界、界高二三・〇糎、二一(三四

紙

【扉絵】説法図・木牌(卷一卷首)、木記・韋馱天像(卷九卷末)

【版心】「花(華) 嚴經疏鈔 (卷次) (紙數)」

【序跋】「重刊大方広仏華嚴經疏演義鈔序(嘉靖三四年、徐階序)」・「大方広仏華嚴經疏演義鈔序(澄觀述)」

(卷一卷首)、「重刊大方広仏華嚴經玄談疏鈔科合集序」(卷九卷末)

【刊記】「大明嘉靖三十三年二月初四日為始重刊」(卷一卷末)

「發心刊板／内府各衙門太監等官／李慶 李端 袁亨 杜嶺 楊保 喬經 薛瓚 /申英 王時

潘印 楊倫 杜榮 趙軒 蔡盛／陳準 賀恩 馬玉 韓学 張鉞 伏願／四生九有同登華藏玄門八

難三途共入／毘盧性海」(卷五卷末)

「施財信女盛氏 陳氏 楊氏 汪氏 毛氏／張氏 董氏 莊氏 董氏 李氏／賴氏 崔氏 朱氏

賴氏 郭氏／趙氏 芮氏 史氏 姜氏 楊氏／同刊／大華嚴經疏鈔功德捨女身於今世證男等当來早

遊／華藏速達蓮邦」(卷八卷末)

「内府各衙門太監等官／朱鈞 李江 齊倉 榮憲 馬成 楊傑／馬道成等 楊忠等 徐登等 李朗

等／李俊 王穆 鄧禎 李昇 葛玉 朱朝／李熙 謝祿 薛善 高寬 劉進 劉春／王臣 山保

斬昇 張暹 盧鼎 李朝／施財發心鋟梓／大方広仏華嚴經疏鈔功德伏願悟／毘盧之性海入 普賢之

行門」(卷九卷末)

【印記】「通明／之印」(朱印、陽刻、一・七×一・五糎)「慧像／凶書」(朱印、陰刻、一・八×一・五糎)

【備考】卷九尾題前に「勅賜南禪寺住持妙名会集」とあり。全般に朱句点・朱線あり。

注華嚴法界觀門科文

一卷一帖

【撰者】圭峯蘭若沙門宗密注・姑蘇堯峯住持伝法賜紫尊式治科・福唐文殊寺住持伝教賜紫潜卿詳定・福唐大

中寺住持伝法海印大師德隆詳證

【外題】「修大方広仏華嚴法界觀門科」

【版式】三三・七×一〇・九糎、上下二重界、界高二二・〇糎、十紙

【刊記】「成化辛丑（二七、一四八一）歲／古杭道寧科」（卷末）

【印記】「通明／之印」（朱印、陽刻、一・七×一・五糎）

【備考】卷末に「華嚴法界觀門科」を合刻。科文の末に「右臣字号共計八万六千七百六十四字」とあり。

注法界觀門

一卷一帖

【撰者】圭峯蘭若沙門宗密注・姑蘇堯峯住持伝法賜紫尊式治科・福唐文殊寺住持伝教賜紫潜卿詳定・福唐大
中寺住持伝法海印大師德隆詳證

【外題】「修大方広仏華嚴法界觀門註」

【版式】三三・七×一〇・九糎、一紙五折、一折六行十三字詰、注双行小字、上下单辺、界高二三・五糎、
二五紙

【序跋】「注華嚴法界觀門序（蘇州刺史裴休述）」（卷首）

【印記】「通明／之印」（朱印、陽刻、一・七×一・五糎）

【備考】本文上段に科文、卷末に「略法界觀門（杭烏山沙門智藏注）」、尾題の下に「二十五帋尾捻總計一万
四千九百卅五字」、卷末に紋様、本文中に朱句点あり。

円覚経疏前序科文 上、下

二卷一帖

【外題】「大方広円覚経略疏科」

【版式】三三・七×一一・〇糎、上下单辺、界高二四・三糎、一紙五折、一折六行十九字詰、十六紙

【版心】「科」（紙数）

【印記】「通明ノ之印」（朱印、陽刻、一・七×一・五糎）、「慧像ノ図書」（朱印、陰刻、一・八×一・五糎）

大方広円覚修多羅了義経略疏註

卷上之一、二、卷下之一、二

四卷四帖

【撰者】唐終南山草堂寺沙門宗密述

【外題】「大方広圓覚経略疏（帖数）」

【版式】三三・八×一一・〇糎、一紙五折、一折六行十七字詰、上下单辺、界高二四・〇糎、二〇ノ二五紙

【扉絵】説法図・木牌（卷上之一卷首、一部欠、説法図左下に「華嚴経疏像」とあり）、木記・韋駄天像（

卷下之二卷末）

【版心】「覚疏」（卷次）（紙数）」

【序跋】「裴休序」「宗密序」（卷上之一卷首）、「圭峯定慧禅師遥禀清凉国師書（宗密）」（卷下之二卷末）

【刊記】「錢塘精進教院住持嗣講比丘浄照謹ノ将長財敬依旧本命工重刊ノ時紹興十四（一一四四）年九月望

日題」（卷下之二卷末）

【印記】「通明ノ之印」（朱印、陽刻、一・七×一・五糎）、「慧像ノ図書」（朱印、陰刻、一・八×一・五糎）

【備考】朱句点あり。

大方広仏華嚴経普賢行願品疏科文

一卷一帖

【撰者】 圭峯草堂寺沙門宗密

【外題】 「華嚴経行願品別行疏鈔科文」

【版式】 三三・八×一〇・八糎、一紙五折、一折六行、十四紙（欠あり）

【版心】 「行願品科文（紙数）」

【印記】 「通明／之印」（朱印、陽刻、一・七×一・五糎）

大方広仏華嚴経普賢行願品別行疏鈔

卷第一～六

六卷六帖

【撰者】 勅太原府大崇寺沙門澄観別行疏・圭峯草堂寺沙門宗密随疏鈔

【外題】 「華嚴経行願品別行疏鈔卷第（幾）」

【版式】 三三・八×一二・二糎、一紙五折、一折六行十七字詰、上下二重界、界高二三・一糎、二一～四四
紙

【扉絵】 説法図・木牌（卷一卷首）、木記・韋馱天像（卷六卷末）

【版心】 「行願品疏鈔卷第（幾）（紙数）」

【序跋】 「宗密序」（卷一卷首）

【刊記】 「謹施飄資刊板／円寂仏泰覚靈 円寂成玉覚靈／円寂清證覚靈／明西法錦覚靈／以此功德伏願 花
開蓮現見／本性之弥陀花落蓮成了唯心之浄土生生世世依願／修行上弘 仏道下化衆生」（卷三卷末）

「捨財刊板比丘清善 大果 願理 覚真 清梅／清選 清現 清江 清華 統淵 周普／円興 自

成 法澄 円信 能善 道香／洪来 慧来 慧金 明朗 祖永 明川／法雨 円経 明昇 円保
能徹 円来／常進 洞割 仏宝 周普 仁貴 仁奈／清鑑 清懐 清東 浄大 浄鐸 浄譲／仁永
仁光 恵通 浄時 真允 真然／悟頤 真実 浄池 真燈 真祿 真寿／玄寿 仁謚 常浩 真左
趙道／徳晞／各捨依資侵梓／大方広仏華嚴経疏鈔功德上報／四恩 下資三有 法界有情 同生／浄
土」(卷五卷末)

【印記】「通明／之印」(朱印、陽刻、一・七×一・五糎)、「慧像／図書」(朱印、陰刻、一・八×一・五糎)
【備考】尾題前に「勅賜南禅寺住持妙名会集」とあり。各巻の一紙と二紙の継ぎ目に「真玉」の墨書。全般
に黒・朱の句点あり。

華嚴原人論科

一巻一帖

【撰者】沙門円覚

【外題】「華嚴原人論科」

【版式】三三・六×一〇・九糎、一紙五折、一折五行、上下二重界、界高二三・七糎、五紙

【版心】「原人論科 (紙數)」

【印記】「通明／之印」(朱印、陽刻、一・七×一・五糎)、「慧像／図書」(朱印、陰刻、一・八×一・五糎)

華嚴原人論

一卷一帖

【撰者】終南山草堂寺圭峰蘭若沙門宗密述

【外題】「華嚴原人論」

【版式】三三・四×一〇・九糵、一紙五折、一折五行十五字詰、上下二重界、界高二三・八糵、十四紙

【版心】「原人論」（紙数）

【序跋】「華嚴原人論序（裴休序）」、「華嚴原人論并序（宗密序）」（卷首）、「華嚴原人論後序（屏山居士李純甫撰）」（卷末、写刻体）

【刊記】「信官陳季施板一塊」（第三紙）、「内官監左少監郭朝施板一塊」（第十三紙）

【印記】「通明ノ之印」（朱印、陽刻、一・七×一・五糵）、「慧像ノ圖書」（朱印、陰刻、一・八×一・五糵）

【備考】補筆・訂正、朱句点・朱線あり。

華嚴原人論解

卷上、中

二卷二帖

【版式】三三・五×一一・〇糵

【備考】二帖とも前表紙のみ存。

円覚経略疏之鈔

卷第三、八、十、十二

八卷八帖

【撰者】圭峯蘭若沙門宗密於大鈔略出

【外題】「円覚経略疏之鈔卷第(幾)」

【版式】三三・八×一一・〇糎、一紙五折、一折六行二一字詰、上下二重界、界高二三・六糎、二一〇二九紙

【扉絵】木記・韋馱天像(卷十二卷末)

【版心】「円覚小鈔卷(幾) (紙数)」

【刊記】「募縁 比丘祖秀」(卷六卷末)

【印記】「通明ノ之印」(朱印、陽刻、一・七×一・五糎)、「慧像ノ図書」(朱印、陰刻、一・八×一・五糎)

【備考】全般に朱句点あり。

円覚経略疏之鈔

卷第八

一卷一帖

【撰者】圭峯蘭若沙門宗密於大鈔略出

【外題】「円覚経略疏之鈔卷第八」

【版式】三三・八×一一・〇糎、一紙五折、一折五行二一字詰、上下二重界、界高二三・一糎、二八紙

【版心】「円覚小鈔卷八 (紙数)」

【備考】内題の下に「一真」の朱筆あり。補筆・訂正、朱句点・朱線あり。前掲同経とは紙質が異なる。

華嚴法界觀通玄記 卷上、中、下

三卷三帖

【撰者】東京夷門山釈広智大師本嵩集

【外題】「華嚴法界觀通玄記卷（幾）」

【版式】三四・三×一・〇糎、一紙五折、一折六行二一字詰、上下二重界、界高二三・〇糎、三二紙（上卷）、三二紙（中卷）

【版心】「玄記（巻次）（紙数）」

【序跋】「華嚴法界觀通玄記序（余杭靈芝蘭若釈元照述、大觀巳丑（三、一一〇九））」（巻上巻首）

【印記】「通明／之印」（朱印、陽刻、一・七×一・五糎）、「慧像／図書」（朱印、陰刻、一・八×一・五糎）

【備考】巻下は前表紙のみ存。巻上の最末紙裏に「顕恩寺隠雲」の墨書、全般に朱句点・朱線、書き込みあり。

大乘起信論疏科

一卷一帖

【撰者】長水沙門子璿修定

【外題】「大乘起信論疏科」

【版式】三三・三×一〇・九糎

【印記】「通明／之印」（朱印、陽刻、一・七×一・五糎）

【備考】第二紙以降欠。巻首撰者の下「重刊発例／義見後叙」とあり。朱筆の補足訂正箇所あり。

大乘起信論疏

卷上之一、二、卷下之一、二

四卷四帖

【撰者】西太原寺沙門法藏述・草堂沙門宗密録之注於論文之下

【外題】「大乘起信論疏（幾）」

【版式】三三・二×一・〇糎、一紙五折、一折四行十五字詰、上下單界、界高二三・〇糎、有界、二〇〇
二五紙（欠あり）

【扉絵】木記・韋馱天像（卷下之二卷末）

【印記】「通明ノ之印」（朱印、陽刻、一・七×一・五糎）、「慧像ノ図書」（朱印、陰刻、一・八×一・五糎）

【備考】全体に朱句点・朱線あり。

起信論疏筆削記

卷第三、六

四卷四帖

【撰者】長水沙門子璿録

【外題】「大乘起信論筆削記（幾）」

【版式】三三・三×一〇・九糎、一紙五折、一折六行二二字詰、上下單界、界高二三・三糎、三七〇四七紙
（欠あり）

【扉絵】木記・韋馱天像（卷六卷末）

【序跋】「南山高麗講起信玄叙（玉峯可堂師會撰、真如賢首教院住持伝教止堂戒月敬書（嘉定庚辰、十三、一二二〇））」（卷六卷末、写刻体）

【印記】「通明ノ之印」（朱印、陽刻、一・七×一・五糎）、「慧像ノ図書」（朱印、陰刻、一・八×一・五糎）

【刻工】「金臺蘇忠刊」(卷六叙文)

【備考】全体に朱句点・朱線あり。

華嚴懸談会玄記

卷第一、三、七、九、十三

十一卷十一帖

【撰者】蒼山再光寺比丘普瑞集

【外題】「華嚴懸談会玄記」

【版式】三五・〇×一二・二糎、一紙五折、一折九行二三字詰、上下单界、界高二五・六糎、二二、三三紙

【版心】「会玄(記)(帖次) (紙数)」

【序跋】「普泰序(正徳四(一五〇九)年)」(卷一卷首、写刻体)

【刊記】「麻谷里造経信士尹朝宰室人馬氏」(卷一卷末、墨書)

「麻谷里造経信士張彦遠・張自安」(卷三卷末、墨書)

「捨財施主 比丘圓秀 張学 辛世英 朱朋 朱有学 子懷」(卷九卷末)

「施財僧覚忻 正照 徳存 漣□ 定住 洞潮 □明/施財信士蘇真 朱庭王 朱環 張善 張浩

蘇鷲」(卷十二卷末)

【印記】「通明/之印」(朱印、陽刻、一・七×一・五糎)、「慧像/函書」(朱印、陰刻、一・八×一・五糎)

【刻工】「中貴官劉溥刊」(卷一序)、「藍」(卷四、第二七紙外枠)、「肖秀」(卷五、第二五紙外枠)、「中官王

泰」(卷七、第三・四紙)、「宗玉」(卷九、第十五・十六紙)

【備考】朱句点・朱筆あり。

肇論新疏 卷中

一卷一帖

【撰者】五台大万祐国寺開山住持釈源大白馬寺宗主贈邦国公海印開法大師長講沙門文才述

【版式】三三・一×一〇・六糎、一紙五折、一折六行十八字詰、上下二重界、界高二三・六糎、四六紙

【版心】「肇疏中 (紙数)」

【備考】内題・尾題の下に梵字あり。

肇論新疏游刃 卷中

一卷一帖

【撰者】五台大万祐国寺開山住持釈源大白馬寺宗主贈邦国公海印開法大師長講沙門文才述

【外題】「肇論新疏游刃卷中」

【版式】三三・二×一〇・七糎、一紙五折、一折六行十八字詰、上下二重界、界高二三・三糎、四四紙

【版心】「肇刃中 (紙数)」

【備考】内題・尾題の下に梵字あり。

楞伽阿跋多羅宝經註解 卷第一〜八

八卷八帖

【撰者】宋求那跋多羅奉詔訳・天界善世禪寺住持臣僧宗泐・演福天台講寺住持臣僧如玘同註

【外題】「註解楞伽阿跋多羅宝經卷之(幾)」

【版式】三五・一×一二・一糎、一紙五折、一折五行十七字詰、上下二重界、界高二六・四糎、二一〜二九

紙

【扉絵】 説法図・木牌（木牌に「皇図永固 帝道遐昌／仏日増輝 法輪常転」）（巻一卷首）、木牌（奉／儀 長興寺上禪堂／心昉言）の朱筆）・韋駄天像（巻八巻末）

【序跋】 「重刊楞伽阿跋多羅宝経註解序（永楽二〇（二四二二）年、漢郡王瞻圻謹序）」（巻一卷首）、「識語（如玘）」（巻八巻末）

【刊記】 各巻の版心・料紙継ぎ目に施財刊記多数あり。嘉靖壬戌（四一、一五六二）重刊記（巻八巻末）

【印記】 「通明／之印」（朱印、陽刻、一・七×一・五糎）、「慧像／図書」（朱印、陰刻、一・八×一・五糎）

【備考】 各巻首・末に「長興寺上禪堂」「上禪堂昉」「脱凡」「上禪堂心昉」「上禪堂脱凡」「心昉」「長興寺上 禪堂脱凡」の朱筆、全般に朱句点・朱線あり。

八識規矩補註・大乘百法明門論解・唯識三十論

三経同巻一帖

【撰者】 普泰補註（八識規矩補註）、天親菩薩造・唐三藏法師玄奘奉詔訳・増脩慈恩法師註解・普泰増修（大乘百法明門論解）、世親菩薩造・三藏法師玄奘奉詔訳（唯識三十論）

【版式】 三三・九×一〇・五糎、一紙五折、一折六行二〇字詰、上下二重界、界高二二・三糎、四八紙（欠あり）

【扉絵】 説法図（欠落あり）・木牌（「皇帝万歳万万歳」）（巻首）、木記・韋駄天像（巻末）

【版心】 「（紙数）」

【序跋】 「八識規矩補註序（普泰書、正徳辛未（六、一五一））」、「脩補大乘百法明門論後序（普泰書、正

徳辛未（六、一五一）〈 〉

【刊記】「嘉靖辛卯（十、一五三） 歳無射月朔日天慶寺發心重刊」「重刊唯識三十頌因久不流行奉／仏各衙門太監等官／劉承 李奈 許廣 張信 張斌 任永／王常 趙太 李騰 吳鎮 史保 趙璧／比丘法来／比丘明玄鳩衆印行」（卷末）

【印記】「通明／之印」（朱印、陽刻、一・七×一・五糎）、「慧像／函書」（朱印、陰刻、一・八×一・五糎）
【刻工】李□、賈丹、劉玉、石江、李竺、王□、李寧、王魯、王永、潘□、李壽、葉彬、朱柄、王鉞、蔡進、蘇保、婁朝、張臣、崔欽、郭□、張常、李得、魏宗、趙弼、張□、□永、郝昂、趙□、陳□、李朝、鄭郷、孟紀、李麻、田忠、馬真保

【備考】卷首序に「長興寺上禪堂印造」、卷末の木牌に「長興寺上禪堂印造／心昉造」の朱筆あり。全般に書き込み・紙片あり。

仏説観無量寿仏経疏科文

一卷一帖

【外題】「仏説観無量寿仏経疏科文」

【版式】三三・七×一〇・四糎、一紙五折、一折六行、上下二重界、界高二三・二糎、十紙

【印記】「通明／之印」（朱印、陽刻、一・七×一・五糎）、「慧像／函書」（朱印、陰刻、一・八×一・五糎）

仏説觀無量壽仏経疏 卷上、下

二卷二帖

【撰者】劉宋西域三藏法師曇良耶舍訳・天台智者大師疏文

【外題】「仏説觀無量壽仏経疏（上・下）」

【版式】三三・八×一〇・七糎、一紙五折、一折五行十五字詰、上下二重界、界高二三・〇糎、二二（卷上）、十五紙（卷下）

【扉絵】説法図（卷上卷首、四紙分、一紙六折、一部欠あり）

【版心】「觀無量壽仏経疏卷（上・下）（紙数）」

【序跋】「仏説觀無量壽仏経疏并序（天台智者大師説）」（卷上卷首）、「刊行觀無量壽仏経疏鈔後跋（成化丙午（二二、一四八六）、僧録右覚義兼慧照開山第一代住山可祐拝述）」（卷下卷末）

【印記】「通明／之印」（朱印、陽刻、一・七×一・五糎）、「慧像／図書」（朱印、陰刻、一・八×一・五糎）

【刻工】「傳通」「張妙玉宋懷」（卷上版心）

觀無量壽仏経疏鈔宗鈔 卷第二、三、五、六

四卷四帖

【撰者】四明沙門知礼述

【外題】「觀経疏鈔宗鈔卷第（幾）」

【版式】三三・八×一〇・七糎、一紙五折、一折六行十七字詰、上下二重界、界高二二・七糎、十四（二一）紙

【扉絵】木記・韋駄天像（卷六卷末）

【版心】「妙宗鈔（卷次）（紙数・施財刊記）」

【刊記】「翁□□氏、商鷲母趙氏、段文、張寬、李安、王妙果、岳琮、盧妙通、路妙全、劉妙緣、尚清、劉妙原、牛悟山、孫妙榮、李成、唐妙清、邵敬、韓惠能」（卷二各版心）

「比丘悟聰、信官王善、信士汪義、信士汪善、信士騰俊、信女崔妙緣、梅洪、董善惠、信士崔福広、楊妙善、崔善淨、信女楊妙真、信士霍智、信女陳妙聚、信士張勝、信女孫妙玉」（卷三各版心）

「京都順天府大興縣思城坊居住奉／仏信女卓氏妙慶夫主卓福広上同居世／父卓覺海 母楊氏 王氏

發心捨財刊造妙觀疏鈔経板第／五卷報棲火宅心募蓮邦以水泡之財祈金剛之体存亡普利恩／有均沾賞花池似飢人得食遊宝地如遠客還家／大明成化乙巳（二一、一四八五）七月吉日刊造」（卷五卷末）

【印記】「通明／之印」（朱印、陽刻、一・七×一・五糎）、「慧像／函書」（朱印、陰刻、一・八×一・五糎）

【備考】全般に朱句点あり。

孟蘭盆経疏孝衡鈔

卷下

一卷一帖

【撰者】講経律論沙門遇栄集

【外題】「孟蘭盆経疏孝衡鈔卷下」

【版式】三四・三×一〇・九糎、一紙五折、一折六行十七字詰、注小字双行、上下单辺、界高二四・一糎、二五紙（欠あり）

【版心】「孟疏（紙数）」

【序跋】（卷末に跋文あれど末部欠落のため、撰者・刊年等不詳）

【印記】「通明ノ之印」(朱印、陽刻、一・七×一・五糎)、「慧像ノ図書」(朱印、陰刻、一・八×一・五糎)
【備考】尾題「仏説孟蘭盆經疏」。卷末に音義あり。朱句点・朱線・書き込みあり。続蔵本(一―九四―四)
と内容一致せず。

大般涅槃經 卷第三十七

一卷一帖(写本)

【撰者】北涼天竺三藏曇無讖奉詔訳

【版式】三四・五×一二・〇糎、一紙五折、一折五行十五字詰、上下二重界、界高二五・八糎、二二紙

【扉絵】説法図(一折分存、木版)

【版心】「浄卷七 (紙数)」

【印記】「黄梅ノ寺記」(朱印、双郭、陽刻、三・五×三・八糎)

【備考】卷末に音釈あり。各料紙継ぎ目に「涅槃經三十七 (紙数)」の墨書あり。

金剛般若波羅密經

一卷一帖

【撰者】姚秦三藏法師鳩摩羅什訳

【外題】「金剛般若波羅密經」

【版式】三一・四×一二・五糎、一紙五折、一折四行十一字詰、上下二重界、界高二三・七糎、三〇紙

【扉絵】説法図・木牌(「皇帝万歳万歳万万歳」)(卷首)、木記・韋馱天像(卷末)

【序跋】「金剛經啓請」(巻首)

【刊記】「^マ太清乾隆四十九(一七八四)年歲次甲辰季春穀旦／弟子胡鈺・鱗薰沐敬印／法源寺存板」(巻末)

【備考】裏表紙裏面に「和」の墨書あり。

仏説大阿弥陀経淺註

巻下

一巻一帖

【撰者】明唐安五峰山法王寺沙門明覺述

【外題】「仏説大阿弥陀経淺註巻下」

【版式】三三・〇×一〇・七糎、一紙五折、一折六行十七字詰、上下二重界、界高二三・六糎、三一紙

【扉絵】木記・韋駄天像(巻末)

【版心】「弥陀淺註巻下 (紙數)」

【序跋】「大阿弥陀経後跋(淳祐己酉(九、一二四九)、海山旧住空常氏法起謹跋)」「新註大阿弥陀経序(隆慶己巳(三、一五六九)、竹林程自慎序)」(巻末)

【刊記】「信官王忠施」(第二四紙)、「信官張竒施」(第二八紙)、「信心弟子盧圓空發心刊施」・「内府信官李官引進監造」(巻末木記)

【印記】「通明ノ之印」(朱印、陽刻、一・七×一・五糎)、「慧像ノ圖書」(朱印、印刻、一・八×一・五糎)

【備考】巻首内題下に朱の梵字、及び「持者通明」の墨書あり。巻末に、音釈あり。韋駄天像の右下に「古燕趙文「以下欠」」の印刻あり。裏表紙見返しに「妙住叵」の墨書あり。

慈悲道場懺法 卷第二、六

二卷二帖（写本）

【版式】三二・八×一一・〇糹、一紙五折、一折五行十五字詰、上下二重界、界高二三・八糹、ともに十七紙（欠あり）

【備考】音釈あり（巻六の音釈自体は欠）。

仏祖統紀 卷第十三之十四、十五

三卷二帖（写本）

【撰者】宋景定四明東湖沙門志磐撰

【外題】「仏祖統紀巻第（幾）」

【版式】三三・三×一一・三糹、一紙五折、一折六行十七字詰、上下単界、界高二三・一糹、十五（二二紙

【版心】「昆一（二）（紙数）」

【備考】卷十三・十四の巻末に「弟子常懐智膳／録」、卷十五の巻末に「弟子董進孝」の墨書あり。

根本薩波多部律攝 卷第十五

一卷一帖（写本）

【撰者】尊者勝友造・三藏法師義浄奉制訳

【外題】「根本薩波多部律攝巻第十五」

【版式】三三・三×一一・二糹、一紙五折、一折六行十七字詰、無界、十六紙

【版心】「児五（紙数）」

【備考】音釈あり。卷末に「信士常秉義」の墨書あり。

妙法蓮華經 卷第一、五

二卷二帖

【撰者】姚秦三藏法師鳩摩羅什訳

【外題】「大乘妙法蓮華經卷第(幾)」

【版式】三五・六×一一・九糎、一紙五折、一折五行十五字詰、上下二重界、界高二五・九糎、卷第一は八紙以降欠、卷第五は三四紙

【扉絵】説法図・木牌(巻一卷首)

【序跋】「御製大乘妙法蓮華經序(永樂十八、一四二〇)」(巻一卷首)

【備考】木牌に「御製詩(永樂十八年四月十七日)」あり。句点あり。

大乘妙法蓮華經弘伝序科文

一卷一帖

【外題】「妙法蓮華經要解科文」

【版式】三三・八×一〇・七糎、一紙五折、一折六行、上下二重界、界高二三・五糎、十五紙(前半欠)

【版心】「要解科(紙数)」

【印記】「通明ノ之印」(朱印、陽刻、一・七×一・五糎)、「慧像ノ図書」(朱印、印刻、一・八×一・五糎)

妙法蓮華經 卷第二、三

二卷二帖

【撰者】温陵開元蓮寺比丘戒環解

【外題】「妙法蓮華經要解卷第(幾)」

【版式】三三・七×一〇・八糎、一紙五折、一折六行十七字詰、上下二重界、界高二三・三糎、卷第二は一折のみ、卷第三は四四紙(欠あり)

【扉絵】木記・韋駄天像(卷三卷末)

【版心】「要解卷(幾) (紙数)」

【印記】「通明ノ之印」(朱印、陽刻、一・七×一・五糎)、「慧像ノ圖書」(朱印、印刻、一・八×一・五糎)

【備考】朱引、朱句点あり。

主要仏典解説

『大方広仏華嚴經疏序演義鈔』

澄観（七三八〜八三九）が著わした『八十華嚴』の註釈書である『華嚴經疏』（二〇卷）を、みずから註釈した『隨疏演義鈔』（四〇卷（のち九〇卷）の玄談部分をさらに別出したものが本書で、「大方広仏華嚴經疏序演義鈔」「華嚴玄談」「華嚴懸談」などの異称がある。

（本明版は、嘉靖三三（一五五四）年から翌年にかけて重刊されたものであるが、その経緯について卷九の卷末に付せられた「重刊大方広仏華嚴經玄談疏鈔科合集序」によると、

……然而經・玄談・疏・鈔・科、各為卷帙。閱者、往往有配合繁難之嘆。今、南禪住山西來明禪師、洞達禪理、飽諳教乘。每於院務之暇、即以
此經・玄談・疏・鈔・科文、合而一之、繕写刊梓、印施流通、以便學者。自正統乙丑經始、至景泰癸酉、厥工既完。……

とあり、本書はもと、南禪寺の西來明禪師が『華嚴經』『玄談』『華嚴經疏』『演義鈔』『科文』を合わせて一書とし、後学のため正統十（一四四五）年より景泰四（一四五四）年にかけて開板したものであった。同序の末部は「：是為序。時」の一文を最後として終わっており、ただちに木牌・韋駄天像が続く。序と木牌等の料紙は貼り合わされているから、当初からその箇所（一折分か）が欠落していたと思われる、本序の執筆者と紀年などを
知ることができないのは惜しまれる。

西來明禪師が刊行したという本書を、さらに一〇〇年後の嘉靖三三〜三四年に重刊したのが本明版である。本来は『科文』と『玄談』以外に經・

疏・鈔の部分も存在したはずである。重刊の経緯について、卷一卷首の徐階撰「重刊大方広華嚴經疏演義鈔序」によると、

……司設監掌印太監寅齋暨公与名下張君東川等、惇尚斯学、会昔賢之遺文。閱西來南禪之諸卷、諗高菴之遺墜、無憚繁費、鳩工授梓、將以正本印心隨、因普施、……工始於嘉靖甲寅春仲、至乙卯秋仲告成、……大明嘉靖三十四年歲次乙卯孟冬吉日、賜進士及第光祿大夫柱国少保兼太子太傅礼部尚書武英殿大学士華亭徐階序。

とあり、司設監掌印太監の暨某らが開板費用を捐資して重刊したという。卷五および卷九の卷末には開板費用を喜捨した四七名あまりの人物名が列記されているが、彼らは宦官暨某らの呼びかけに応じた人々と思われ、そこには「内府各衙門太監等官」とあるから、彼らも十二監に所属する宦官たちである。また卷八の卷末にも女性二〇名の姓名が列記されるが、彼女らは女官六局に属する人々であろう。したがって本明版は、宦官が中心となって官中で印行していた、いわゆる経廠本と考えられる。この他、『華嚴原人論』『華嚴懸談会玄記』『楞伽阿跋多羅宝經註解』『八識規矩補註・大乘百法明門論解・唯識三十論』なども、本明版同様に宦官が刊行に携わった経廠本のごとくである。

なお、「重刻序」の撰者である徐階は、字は子升、松江華亭の人。陽明学を創始した王守仁の高弟のひとりであり、万曆十一（一五八三）年に八才をもって没している。『明史』卷二二三に立伝。

現在流布している『科文』と『玄談』は、正統藏本（一―八―一―四）である。本明版の『科文』は第一卷のみの存であるが、統藏本の第一卷所収のそれと全同である。また『玄談』は前後の序文以外、統藏本と内容はまったく一致する。統藏本『玄談』は、おそらく寛永四（一六二七）年本もしくは寛文十三（一六七三）年の黄檗（鉄眼版）藏本を底本としていていると思われる。これとは別に中国では明末の嘉興藏統藏に初めて入蔵されるが、その底本は葉祺胤が天啓二（一六二二）〜同六（一六二六）年に「経」「疏」「鈔」を合刻して刊行したものに依っている。嘉興藏統藏本の「凡例」には、

……至昭代嘉靖間、不知何師、録鈔於疏下、彙成為一、鏤板流通、存武林昭慶寺。則以經之卷數為主、經前懸談紙數繁多、別勒九卷。……此板僅垂六十余年。因當時繕写銀刻、概無良工。遂至字画模糊、覽者患苦。仍以昭慶冊為底本、……

とあり、嘉靖年間に僧某が經・疏・鈔を合刻して開板し、その板木を武林（江蘇省杭県）の昭慶寺に納めたが、六〇年後のいま、板木の字画に摩滅が著しいため、葉祺胤は「昭慶冊」を底本とし、校正の手を加えて刊行したものである。この昭慶寺本は、嘉靖三七（一五五八）～同四二（一五六三）年に開板されたらしく、また葉氏が「昭慶冊」と表現しているから冊子本の形式であったようである。この昭慶寺本を翻刻したものがわが寛文四年本であるらしい。すると冊子本形態の昭慶寺本は、本明版が北京で宦官らの捐資によって重刊された直後に開板されたことになる。両者の関係がいまひとつ判然としないが、ともかく本明版は「玄談」のみとはいえず、「玄談」をはじめとする澄観の『華嚴經』の疏・鈔類の明代における変遷を跡づける上で重要なテキストといえよう。

『注法界観門』

杜順（五五七～六四〇）の作といわれる『法界観門』に、圭峯宗密（七八〇～八四一）が注を施したものが『注華嚴法界観門』である。本書は、大正蔵（第四五卷）をはじめ、縮刷蔵（陽三）・卍蔵などに収録されている。大正蔵本は嘉興蔵を受けた黄檗（鉄眼版）蔵本を底本としており、巻首の「裴休序」と本文から成っている。

本明版の構成は、巻首の「裴休序」、本文（上段に科文）、さらに巻末に「略法界観門（杭烏山沙門智蔵注）」が付せられている。この構成に近いのが、大正蔵本が校勘本として使用するわが慶安二（一六四九）年本（大谷大学所蔵）である。

『注華嚴法界観門』は、宋代の福州版大蔵経（東禅寺蔵・開元寺蔵）に続刊入蔵され、その後では明の南・北蔵、さらには清の龍蔵に入蔵されている。龍蔵本の巻末には浄源（一〇一～一〇八）撰「嘉祐重校注法界観門後序」があり、これによって宋代における本書の刊行状況を知ることができる。すなわち、

……上都諸郡、鏤版流行、互有否臧者不一。炎宋皇祐中、因迹呉門、博求衆本、旁索輿義、參而校之。仍治科文一冊・助修記兩卷、授于來学。

嘉祐五年春、又以所校観門、再請雲間興教大師・錢塘明義大師、重定諸本、用伝于代。二師、羽教翼観、名耀四方、既考其辞、力務討論、僉曰、

上都観本、与西蜀文同。潭州印本、注義前却。楚蘇印版、字多訛脫。独杭本、注文加千余字。若乃仰古規、今按文責義、唯上都・西蜀兩本、与夫玄鏡一揆。誠為標準耳。源曰、唯唯越二年、有好事者、特募深信、刊鏤斯文、匠工既畢。懇求後序、……時嘉祐七年壬寅立夏後三日、於賢聖藏院西方丈序。

とある。これによれば、上都（開封か）近辺で刊行されていた諸テキストには出入があった。そこで浄源は、皇祐年間（一〇四九〜五三）に江南に赴き、衆本を集め『科文』一冊と『助修記』二巻を作成したという。その後浄源は、嘉祐五（一〇六〇）年春、みずから作成したテキストを携えて雲間（松江）の興教大師と錢塘の明義大師のもとへ出向き、重定を依頼した。二師とも、同書のテキストとして上都本と西蜀本を標準とすべきであると、その後二年を経た嘉祐七（一〇六二）年に「好事者」の要望でそのテキストを刊行することになり、浄源が求めに応じて後序を寄せたというのである。

このように北宋前期には上都本のほか、西蜀本・潭州本・楚蘇本・杭本などがおこなわれていたが、なかでも上都本と西蜀本とが優れていたらしく、この浄源後序本はこれら二本を基に興教大師・明義大師が重定して刊行されたものであった。なおこの浄源の後序は、明の南・北両蔵本にも存したことは、明末の智旭『閱蔵知津』卷四二の記載からもうかがえるが、大正蔵などが受ける嘉興蔵本系、および本明版には存在しない。

さて本明版の巻首には遵式・潜卿・徳隆の三人の名が列記されており、かれらが編纂したテキストを底本としたものであることがわかる。『科文』には「成化辛丑歲／古杭道寧科」とあるから、成化十七（一四八二）年、道寧なる僧が新たに科文を作成し同書に付して重刊したものと思われる。先に述べたように、この明版には浄源の後序がない。このことから、浄源が後序で述べている諸本のうちのひとつを道寧は重刊したものと考えられる。遵式（九六四〜一〇三二）の名が見えるところから、楚蘇本もしくは杭本ではなかったかと推察される。

わが国には、応永三（一三九六）年に三河守源時則が宋版より翻刻したと思われるテキストがあり（東大寺図書館所蔵）、またこれを江戸時代の慶安二年に覆刻したものが大正蔵本の校勘本として使用されている（大谷大学、大正大学、龍谷大学、高野山大学などに所蔵）。この和刻本の巻末には、本明版と同じと思われる「略法界観門」（杭烏山沙門智蔵注）が合刻されているが、浄源の後序はないようである。こうしたことから見ると、和刻本

と本明版は、宋代前期に江南で遵式らが刊行したテキストの系統に属するものと考えられる。

このように『注華嚴法界觀門』には、浄源後序本系とそれより以前の成立と考えられる遵式本系とがあったことになるが、ただ大正蔵などの祖本ともいえる嘉興蔵本には、浄源の後序もなければ、智蔵の「略法界觀門」もない。嘉興蔵本がなにに基づいたかは判然としない。

ともかく本明版は、浄源が興教・明義の二大師に依頼し、上都本・西蜀本を基に作成する以前におこなわれていた宋版（楚蘇本もしくは杭本）を明代に重刊したものと思われ、本文上段に合刻された遵式の科文とともに、宋代以降における本書の変遷を考える上に貴重な存在である。なお本明版と同様な構成を持つ上下二巻の西夏本がカラホトから出土しており（孟列夫著・王克孝訳『黒城出土漢文遺書叙録』、寧夏人民出版社、一九九四）、また四川省図書館には詳細は不明ながら「宋版」が所蔵されている（四川省中心図書館委員会協公室編『四川省古籍善本書目録』、四川辞書出版社、一九八九）。

『大方広圓覺修多羅了義經略疏註』

本書は、圭峯宗密が慶長三（八三二）年に撰述した『円覺經大疏』（三巻）の精要を搜って簡略化して『円覺經』の本文に註したもので、二巻または四巻から成る。本明版は四巻から成り、これに『科文』上下巻を付したものであるが、刊行年および刊行地は不明。

本書はまず、宋代の福州版大蔵經（東禪寺蔵・開元寺蔵）に続刊入蔵され、その後明の嘉靖年間以降に南蔵に追加入蔵された。万曆時代に北蔵の続蔵に『円覺經略疏之鈔』と合刻入蔵して以降、明末の嘉興蔵や清の龍蔵にも入蔵される。わが国では嘉興蔵を受けた黄檗蔵（鉄眼版）・縮刷蔵・卍統蔵・大正蔵に入蔵している。

本明版の内容は、これら中・日の各大蔵經本と一致している。ところで本明版の卷下之二の卷末には、

錢塘精進教院住持嗣講比丘浄照謹

将長財敬依日本命工重刊

時紹興十四年九月望日題

との題記がそのまま遺されており、これにより本明版は、南宋の紹興十四（一一四四）年に浙江錢塘県の精進教院の淨照なる僧によって重刊された宋版を明代に覆刻したものであることがわかる。題記には「旧本に依り、工に命じて重刊せしむ」とあるから、紹興十四年以前（つまり福州版大藏經本刊行以前）に本書の単行本が流通していた事実を示すもので、この題記は本書刊行の変遷を知る上で貴重な史料である。本明版の『科文』は、龍藏・縮刷藏・卍統藏などに収録されているものと同内容である。

なおわが国には、寛永甲申（一六四四、正保元年）に京都村上平樂寺が刊行した四卷二冊本があるが（本館所蔵）、この和刻本には『科文』はなく、本明版をはじめとした諸本に比して裴休の官銜に省略は見られず、また諸本の末部にある「圭峯定慧禪師遥稟清涼國師書」がないといった独自の特徴を持っている。

『華嚴法界觀通玄記』

本書の撰者である北宋の本嵩に関する詳細な伝記等は不明であるが、彼の撰とされる『華嚴七字經題法界觀三十門頌』（卍統二一八一—四）巻上の冒頭の略伝によれば、本嵩は開封の人で、初め「華嚴大經」を聴き深く玄奥に通じたが、その後各地の禪刹を歴遊した。元豊六（一〇八三）年、嵩（河南省登封県）に隱棲したが、元祐三（一一〇八）年に群賢の要請に応じて開封に入り、禪教二種の学徒のために『通玄記』三巻を造ったという。その後開封城内の夷門山華嚴寺の住持となり、広智大師の号を賜り、のち報本禪寺に遷つて没したという。

禪教二種の学徒のために造ったという『華嚴法界觀通玄記』三巻は、いずれの大藏經にも収められておらず、ただ凝然撰『花嚴宗經論章疏目錄』には「同（法界）觀通玄記三巻 本嵩述」とあり、また謙順集『増補諸宗章疏錄』卷二には「法界觀通玄記三巻 本嵩述」として著録され、その存在は知られているが、テキストそのものは確認されておらず、佚書とされてきた。

常盤大定氏は、昭和九〇十年にかけて京都梅尾高山寺を調査されたが、その報告のなかで、

華嚴法界觀通玄記 二帖

宋広智大師本嵩集。宋版折本、六行、行二十一字。善本。卷中・下の二巻を有する。

と述べられており、これによって宋版の同書三巻のうち、中・下二巻が高山寺に存していたことが明らかにされた。常盤氏は同書の由来を述べられたあと、「『通玄記』そのものは従来未見のものである」とされている。ところが昭和四〇年代におこなわれた「高山寺典籍文書総合調査団」の調査結果に依れば、

華嚴法界觀通玄記卷中・下（宋版） 二帖

〔1〕 卷中

○南宋時代刊、折本装、尾欠、「高山寺」朱印、天地横界、一頁六行、一行二十一字、版心記繼目ニアリ、無点、

〔2〕 卷下

○体裁等〔1〕ニ同ジ、首二紙・中二紙ノミ、版心記折目ニアリ、無点、

と報告され、「善本」と評された常盤氏以降、わずか三〇年ほどの間にだいぶ散佚していることがわかる。ともかく不完全ながらも高山寺本の存在によって、宋代に同書が刊行されたことが確かめられたのである。

さて本明版であるが、三巻中、巻下は前表紙のみの存である不完全本ではあるが、幸いなことに巻上が完全な形で存しており、その巻首には元照（二〇四八〜一一一六）の「華嚴法界觀通玄記序」がある。この序は元照の『芝園集』には未収である。序の後半には、

……東京覚上人、素業華嚴、存心妙觀。嘗從報本（寺）広智和尚（本嵩）、面受斯文、深加考覈、愛其剖文析義、映古奪今。諸家繁衍之文、例皆刊正。自昔未明之義、曲為申通足、以啓迪來蒙、發明觀智。然恐布流中外、伝写差訛。於是、竭力募緣、命工刻板、……若乃窮法界之体用、叙觀注之元由、則裴公・觀序已備。此不復云也。大觀己丑（三、一一〇九）暮秋既望講亭叙。

とあり、本書印行の経緯と時期を知ることができ、貴重である。おそらく高山寺所蔵本は、この時期に刊行された北宋本を底本として南宋時代に覆

刻したものであろう。

述べたように本明版の巻下は、前表紙を除いて本文が全欠していることもあって、その刊行の時期と場所を特定することはできない。装丁や紙質、他の明版と同一の印記の存在などから判断して、同様に華北、ことに北京周辺で刊行されたものではなからうか。なお、先の高山寺宋版と字詰が同一であること、また元照の序を有することから、本明版は宋版を覆刻したものと見てよいであろう。

宋版であるという点においてももちろん高山寺所蔵本は貴重であるが、惜しむらくはほとんどが散佚している現在、宋版を覆刻した本明版は、巻下が欠落しているとはいえ、永らく佚書とされてきた本書の内容を知ることができる点において、まことに貴重な存在である。かかる重要性に鑑みて、本書の巻末に現存する上・中二巻の全部と巻下の表紙を影印収録した。

『起信論疏筆削記』

六世紀半ばに來華した真諦（四九九～五六九）によって翻訳されたとされる『大乘起信論』は、その直後より注釈が試みられ、隋から唐にかけても数多の注釈書が著わされた。ことに元暁（六一七～六八六）の『大乘起信論疏』二卷（大正蔵四四、いわゆる『海東疏』）は、全体に綿密な科文を配した重要な注釈書で、のちに与えた影響が大きいとされる。これをさらに一歩進め、華嚴教学のなかにおける『起信論』の位置づけをしたのが法蔵（六四三～七一二）の『大乘起信論義記』二（または三）卷（大正蔵四四、いわゆる『賢首義記』）である。この法蔵の『義記』を改削し、教禪一致、諸宗融合の立場から独自に『起信論』の解釈を示したのが、宗密の『大乘起信論疏』四卷（縮刷蔵・調八）であり、一般に『注疏』と呼ばれている。宗密の門人伝奥に『注疏』を詳解した『大乘起信論隨疏記』六卷があるとされるが、これは現在佚書である。宗密の『注疏』に基づき、伝奥の『隨疏記』を改削したのが、北宋の子璿（九六五～一〇三八）の『起信論疏筆削記』二〇卷（一〇三〇年述、大正蔵四四）である。

本明版は、宗密の『注疏』および子璿の『筆削記』・『科』を明代に覆刻したものである。子璿が『筆削記』を著述したのは一〇三〇年のこととされるが、京都梅尾の高山寺には本書の宋版が現存している。その報告書には、

○南宋時代刊、折本装、「高山寺」朱印、版心記「起」、継目アリ、無点、

（刊記）（巻首）長水沙門 子璿 修定 重刊発例

義見後叙

（巻尾）上党鮑 方 書

詳符寺比丘 遇誠 安布

とあって『科』が現存し、また同寺には『筆削記』巻一と巻六の鎌倉時代中期の写本が蔵されている。『高山寺聖教目録』（一二五〇年）によれば「起信論註疏四巻 同筆削記六巻」と見え、『筆削記』の傍らに「子璿造」と朱筆されているから、かつて高山寺には『科』以外にも、『注疏』四巻、『筆削記』六巻の宋版が存していたのである。したがって宋代に右三種が印行されていたことは確実である。

ところでこの『科』『注疏』『筆削記』の三者が一括して大蔵經に入蔵するのは、明の北蔵の統蔵部が最初である。万暦年間に追雕された北蔵統蔵の巖・岫の二函に『科』一巻、『注疏』四巻、『筆削記』十五巻が収められており、これがそのまま南蔵の統蔵にも継承される。ただ北蔵を受けた嘉興蔵では、その版式の関係からと思われるが、『筆削記』は二〇巻となっている。また清の龍蔵ではこれら三種を田・赤の二函に収めるが、巻数は北蔵統蔵のそれに準じている。わが国の鉄眼版や近代の縮刷蔵は、嘉興蔵をそのまま継承するが、大日本統蔵では清の統法の会編『起信論疏筆削記会』十巻を収め、大正蔵では『筆削記』のみを収めている。

さて本明版は、右の大蔵經系統本とは異なり、おそらく高山寺の記録に見える宋版と同様な構成を採っていると考えられるが、最も注目すべき点は、本明版の『筆削記』巻六の巻末に宋代華嚴四大家のひとり可堂師会が撰した「南山高麗講起信玄叙」が付されていることである。同「叙」は師会（一一〇二〜六六）が浙江杭州の南山高麗寺で『起信論』を講じた際に撰した文を、止堂戒月が南宋中期の嘉定十三（一二二〇）年に書したものである。このことは、戒月がしたためた本叙を付した『筆削記』をはじめ、『科』や『注疏』が一二二〇年以降に印行されたことを物語っている。同

「叙」のなかに「皇朝」という語が見られ、もちろんこれは宋朝を指していることはいまでもないが、本明版でも「皇朝」の語に改行がおこなわれている。また前掲のごとく、高山寺に残る『科』の巻首には、子瑒の名の下に「重刊発例／義見後叙」なる一文があるというが、これも本明版の『科』に等しく確認できる。ここにいう「後叙」とは、師会の「南山高麗講起信玄叙」を指すのであろう。

こうしたことから判断すれば、本明版は南宋版を忠実に覆刻したものであり、また先の高山寺に存在したであろう宋版『筆削記』六巻も、おそらくは戒月の筆になる師会の「叙」を付したテキストであったものと推察される。なお、本明版の叙文の行間には「金臺蘇忠刊」との刻工名が見える。金臺は河北省易県東南にあり、蘇忠なる刻工の出身地と思われる。つまり本明版も、やはり北京において印行されたものと見てよいのではなかろうか。

ちなみに、嘉興藏本とこれを受けた各大藏経の『筆削記』には師会の「叙」を採録していないが、実は龍藏本の巻十五の巻末に、この「叙」が存在しているのである。龍藏は北藏を受けているから、北藏や南藏の『筆削記』には同「叙」が存在していたのかも知れない。いずれにしても本明版は、南宋版を忠実に覆刻したものと思われ、高山寺南宋本の『科』以外、その形態をうかがえない南宋版の『注疏』や『筆削記』を、本明版によって知ることができるのは、誠に貴重といえよう。

わが国では、『注疏』に慶長十七（一六二二）年の古活字本四巻二冊（飯田九左衛門勝家刊）があり、これを覆刻した寛文九（一六六九）年の同本四巻二冊（法華宗門書堂刊、本館所蔵）がある。また『筆削記』には、元和年間中の古活字本六巻六冊があり（成實堂文庫）、これを寛永十七（一六四〇）年に翻刻した六巻六冊（村上平樂寺刊、本館所蔵）がある。ただし、『注疏』には『科』は付刻されず、『筆削記』にも師会の「叙」は見られない。これらと和刻本の底本は判然としないが、有界、双行小字とした『注疏』の書式が本明版のそれに近く、『筆削記』も南宋版と等しい六巻六冊から成ることなどから、あるいは和刻本の底本は南宋版、もしくはその写本系のテキストであったかも知れない。

『楞伽阿跋多羅寶經註解』

南朝宋の元嘉二〇（四四三）年に求那跋陀羅（三九四―四六八）が漢訳した『楞伽阿跋多羅寶經』は、現存する『楞伽經』の最古訳である。明の太祖洪武帝は、『般若心經』『金剛經』とともに『楞伽經』の注釈を金陵（南京）天界寺住持宗泐および演福寺住持如玘に命じ、洪武十一（一三七八）年に完成して進呈されたのが本書である。

現在、『楞伽阿跋多羅寶經註解』は大正蔵・縮刷蔵の所収本、それに江戸初の正保五（慶安元、一六四八）年本などが通行しているが、これらの底本は明末の嘉興蔵本である。嘉興蔵本の構成は、

① 欽録

② 進新註楞伽經序（洪武十一年、宗泐、如玘）

③ 本文

④ 識語（如玘）

⑤ 新刻楞伽經後題（洪武十一年十二月四日、宋濂題）

から成っており、このうち本書編纂の経緯は②および⑤の序・題記によつてうかがうことができる。すなわち洪武十（一三七七）年十月、洪武帝の命を奉じた宗泐・如玘の両僧は、『般若心經』『金剛經』とともに、求那跋陀羅の『楞伽阿跋多羅寶經』に注釈を加える作業を開始した。前二經に遅れ、『楞伽阿跋多羅寶經註解』は翌洪武十一年の七月によく完成し、洪武帝に上進された。一覽した洪武帝は悦び、「この經の註は誠に精確たり。海内に流布し、学びし者をして講習すべし。」と述べたという。これら三經は、勅命により天界寺で開板されることになったが、巻数が膨大なため作業は着手されなかった。こうした状況のなかで、浄慈禪師（夷簡）は同胞に援助を呼びかける疏文を作成し、その助成を得て洪武十二年五月、ようやく開板作業が開始され、同年十一月に完成したという。

ところで、嘉興蔵本の構成は清の龍蔵本と一致している。龍蔵は基本的に明初の北蔵をベースにしているとされるから、嘉興蔵本や龍蔵本は北蔵

のそれを継承していたと見てよい。事実、今般刊行された『中華大藏經（漢文部分）』第九七冊（中華書局、北京、一九九五）に収録された北藏本の構成は、嘉興藏本・龍藏本と全同なのである。つまり、洪武十一年に編纂し翌年に刊行された『楞伽阿跋多羅寶經註解』は、永樂末より開板される北藏にまずもって入蔵され、それが嘉興藏や龍藏へと継承されていったのである。

さて、本明版であるが、まずその構成を示すと、

① 重刊楞伽阿跋多羅寶經註解序（永樂二〇年、漢郡王瞻圻謹序）

② 本文

③ 識語（如玘）

④ 重刊記（能燭撰、嘉靖四一年）

から成っている。本文自体、嘉興藏本などと出入は見られないが、構成はあきらかに北藏系のものではない。卷一卷首の「重刊序」および卷八卷末の「重刊記」によれば、まず本明版は、永樂帝の孫、漢郡王瞻圻が洪武本を永樂二〇（一四二二）年に重刻し、さらにそのテキストを一四〇年後の嘉靖四一（一五六二）年に再び復刊したものである。漢郡王瞻圻が本書を重刻したとき、北藏は編纂事業が緒についたばかりであるから、あるいは洪武本は北藏系のような構成を採っていなかったのかも知れない。つまり先に列記した嘉興藏本の構成は、北藏入蔵時に改編された可能性がある。それはともかく、本明版の能燭撰「重刊記」には、

……自我国初頒行天下、逮夫漢郡王重刊、用広厥伝。迄今將二百載。而刊本則漸少矣。……御馬監太監徐公、喜為衆善倡、聚財壽梓、以伝無窮。不再朔、而事竣。來徵予跋。……金台広濟寺比丘能燭、同御馬監太監徐仁等統一方縑素、命工刊梓流通、以此功勳、上彭四恩、下資三有、法界衆生、同圓種智。嘉靖壬戌孟夏吉日重刊。

とあり、嘉靖四一年の再刊は御馬監太監の徐仁が発起人となり、北京広濟寺の宝藏能燭の協力を得てのものであった。いうまでもなく御馬監は宦官十二監のひとつであり、本明版も宦官が捐資して刊行した経廠本である。

本明版には、各巻毎紙の版心および糊代部分（つまりは板木の外枠）には、開板費用を寄進した人物の所属・姓名などが確認される。すなわち「司礼監太監王臻施板二十塊」「御馬監太監陳憲施板二十塊」「信官馬騰施板一塊」などをはじめ、延べ二四〇件確認される。このように実に多くの宦官・官僚・僧侶・女性が費用を寄進しており、それら施財記では寄進の額を板木一枚の単位である「塊」に換算して表記している。ここに表記された人々こそ、先の能綱撰「重刊記」中にいう「衆善」を指すものにほかならない。

かれら開板費用寄進者のなかには複数箇所が登場する人物も見られるが、とくに注目されるのは司礼監・御馬監・内官監・尚膳監・尚衣監・司設監・内承連庫などといった所屬を冠した宦官が多数確認されることで、これは明代宦官研究上、貴重な資料といえる。ちなみに、本明版に登場する宦官で、その略歴が判明するのは「司礼監太監王臻」および「御馬監太監馬玉」である。馬玉は、先の「大方広仏華嚴経疏序演義鈔」（嘉靖三三年重刊）巻五巻末中に確認される宦官「馬玉」と同一人物であろう。

『仏説観無量寿仏経疏』

本書は、天台大師智顛（五三八～五九七）が南朝宋の曇良耶舎訳『仏説観無量寿仏経』（一卷）に注釈を加えたとされる著述である。しかしながら、この智顛の『疏』については、早くから真撰を疑う説があり、現在では七世紀後半から八世紀前半に天台系の学者が智顛の名に仮託して編纂したものであることが指摘されている。

曇良耶舎訳の『仏説観無量寿仏経』一卷は、北宋初の開宝蔵以降、中日の歴代大蔵経に入蔵されている。いっぽう、智顛の『疏』一卷は、やや遅れて金蔵から入蔵され（椽函）、以降明・清代の各大蔵経、およびわが縮刷蔵（呂一）・中蔵・大正蔵（三七巻）などに入蔵される。

本明版の刊行の経緯について、巻下巻末の可祐述「刊行観無量寿仏経疏鈔後跋」によれば、

……至劉宋時、有沙門曇良耶舎、創訳此。方陳・隋間、天台大師製疏釈経。又其苗裔礼、法師依疏、造鈔曰妙宗。仏祖之言、仍為一貫。経・疏・鈔、俱入蔵函斯可尚矣。予（可祐）、景泰壬申（三、一四五二）間、与同志結蓮社於西山淨明。除礼誦外、暇則披閲蔵乘。遂獲觀其経及疏鈔。……

惟惜未刊行本、講聽尤艱。遂有秉承之志、慚無勤謹之功。延至成化甲辰（二〇、一四八四）、喜吾徒孫能通者捐長財、而倡率壽諸梓以流通。……予、亦助其贍經附疏檢鈔勾科、涉三寒暑、方得周完、欲求予後跋、……大明成化歲次丙午（二二、一四八六）、仲春中澣日、僧録司右覺義兼慧照開山第一代住山可祐拜述。

とあつて、景泰三年に同志と西山（河北太行山）に蓮社を結んでいた可祐は、折を見て大藏經中の仏典を閲覽し、そのなかに『観無量寿仏經』や智顛の『疏』、さらに『苗裔礼』すなわち四明知礼の『観無量寿仏經疏妙宗鈔』（六卷）を確認した。しかし、惜しむらくは、それが単行本として刊行されておらず、ために研究に不便であつた。その後、三〇年をへた成化二〇年になって、門弟の援助により、ようやく本明版を刊行できたというのである。

こうして刊行された本明版は、薑良耶舎訳の『仏説観無量寿仏經』に智顛の「疏」を合刻して二巻とし、新たに「科文」一巻を加えたものである。こうした構成を持つテキストは、いまのところ知られていないようである。なお、智顛の『疏』には、わが正保五（慶安元、一六四八）年本があり（上下一冊、本館所蔵）、この和刻本の巻末には、北宋太平興國八（九八三）年十月十日の日付をしるした、杭州迎聖集福院主子來の跋文がある（大正蔵本は脚注に正保五年本から跋文を移録）。

ところで、本明版の最も特徴的な箇所は、巻上の巻首を飾る、極めて長い扉絵にある。すなわち、四紙分に亘って展開するその扉絵は、冒頭の部分問わずか（数折分？）に欠落しているが、現存部分だけでもほぼ二メートルに及んでいる。ここには、十六種の観法、いわゆる「十六観」が描かれている。冒頭には「説法図」とおぼしき一図があるが、述べたように欠けており判然としない。その図のあと、「第一日観」より「第十六下品観」まで、それぞれの図（一折分の図から六折分まで多様）と、その内容を伝える二十字前後のキャプションが付されている。

跋文の撰者可祐は、そのなかで「予、亦た其の贍經・附疏・檢鈔・勾科を助け」といつているから、本明版の經文の下書きや校正、さらに『科文』の作成は、いずれも彼の手になるものであつたことがわかる。すると、上巻巻首の長い扉絵も、おそらく成化二〇～二二年に本明版が刊行される際に新たに描かれ付されたものであろう。かかる長い扉絵を持つ仏典の存在は、それ自身が貴重な例証となり得、加えてこの「十六観」図も決し

て精刻とはいえないものの、中国仏教版画史の上からも貴重な資料と思われる。

なお、四明知礼述『観無量寿仏経疏妙宗鈔』の明版も存しているが（六巻中、巻二・三・五・六のみ存）、その刊記によれば北京城内の信者が成化二一（一四八五）年に施財を寄進して刊行しているから、本明版もこの『妙宗鈔』とともに刊行された可能性がある。

【主要参考文献】

- 『仏書解説大辞典』全十三巻、別巻（大東出版社、一九六五、改訂再版）
- 鎌田茂雄『中国華嚴思想史の研究』（東京大学出版会、一九六五）
- 鎌田茂雄『華嚴学研究資料集成』（大蔵出版、一九八三）
- 盧在性「澄観『華嚴経疏鈔』の流伝について」（『仏教文化の展開』（大久保良順先生傘寿記念論文集）、山喜房佛書林、一九九四）
- 常盤大定「宋代に於ける華嚴教学興隆の縁由―高山寺所蔵の宋版章疏、附、写本及欠本の調査に基づきて―」（『支那仏教の研究 第三』、春秋社、一九四三）
- 柏木弘雄「中国・日本における『大乘起信論』研究史」（平川彰編『如来蔵と大乘起信論』、春秋社、一九九〇）
- 高山寺典籍文書綜合調査団編『高山寺経蔵典籍文書目録第二』（高山寺資料叢書第五冊、東京大学出版会、一九七五）
- 高山寺典籍文書綜合調査団編『高山寺経蔵典籍文書目録第四』（高山寺資料叢書第十冊、東京大学出版会、一九八二）
- 高山寺典籍文書綜合調査団編『高山寺経蔵古目録』（高山寺資料叢書第十四冊、東京大学出版会、一九八五）
- 佐藤哲英『天台大師の研究』（百華苑、一九七九）

野沢佳美（文学部助手）

計三種空一標空異色取也外空故以色不異空故之
同第三句一非二標空異色亦斷空故以色即空故
之同此初句會攝空也三從空即取空為有情
可得故以空即色故之同此第二句亦同者謂第
三句中空不異一分之義不礙相對第四句空
不與彼相攝故云不必和會也○後釋○初斷空即
標空一色不著者謂斷空也○二微注言微也者意云
標空即不即何以故以下釋者色不即非空後結者
良由是也餘皆以此者後七問皆以此四更不一
注之故云微也○三釋二初釋上句空色不即若者問
標中上句空色不即空問何以故分釋云色不即是斷
空故不即是空也○標空色也標空者第三句問之
會色無休何種標色也法釋上句也者釋標中上
句句色不即是斷空也○二初斷空即初明通注
中言斷空者釋天虛空者釋空字斷者釋斷字非真
實下體無無知下虛明標空非真空也及觀真心有靈
明知隨緣用能覺用法也○二初釋問此斷空凡有
幾何下云此有○三特成四引據文可知○後初
人眼法○初四明微著問之詞問上所述斷空何人
情計故云外道等謂凡夫不知三果等心為形由華
因果不即生我相隨逐云諸法無因自然而得取而為
有微而為無神形相更無報此名前空也○二乘
斷空者以其心外取法滅色明空觀慧為身有實智
法要計未著諸緣以為為涅槃故身取空法身微智
為求同虛空何微斷哉○後引空者此華公涅槃無名
論中第二數體之文也實以小乘義上家以大乘理
察發廣知微說以標成二乘外道皆有斷空意謂微
此身猶知極極之兩聲故思之漸滅也標如下引經證
謂身心休滅即斷空也何異外道斷斷斷見乎悲情
而標曰微謂云何以下後釋下句此法法簡道初色非
斷空也問謂云何以下後釋下句此法法簡道初色非
幻色標體真異空也故知不即前空明後發前云不即
為兩簡色為微簡注文○初下所以問何回由文
云以色標體真異空故注云以色等真如一心者即謂
中心真如也得生我者即心生成也初合者謂不生或
真如一心與生我妄心合為阿黎耶識即真安和合
名為本識此識有三種相一著相二障相三現相初變
直於起要三現境現即六塵根身等皆時以此識變
起故云而為能變事此則明從未起來若約初相故所
說不同彼即賴耶下自有親生名者標字即賴耶也
從自種生全如來藏性隨緣成其本和合故不同也
○故今下二標真異明攝者歸本也謂初句空等歸於
能變攝攝能變攝歸於真如無相故曰真空○不
合下三問斷空前云不能現現法故不歸空也○所
言下四標斷空通初問云即空即空云斷空其故何
邪故注云隨言歸○四結二初釋釋言長者信也信
由即是其空攝成標中下句以色標體事文也故非斷
空也者結釋上句色不即非法攝成障釋者標非斷
結之釋文也○是故下後結釋言下結標中下句故
不是空者結釋上句注法可知○二微注言微也初釋
二色不即下簡實色也○二微如前可知○三釋二初以
香下釋上句空色由香等色相情執著者非是真空
之理所以標中上句空色不即空注法○初釋問因由
言色法者空色也相者計幻幻為實故○後約顯
法其簡者問上云實色此問何人情計故注云此問
平謂故凡夫執色實者自體不於空以空無開眼念
察初空者後即執色相以為真空也不簡小乘者以
小乘修無執了諸法無人方斷貪著煩惱性生空
理執法空空即礙地不執色即空故不簡也○後釋
下句空者問上云實者非真空者著者字標之問
外別有真空邪故此云實者非明也非執色故即色
為外空耳由共義故則似發問之簡小乘依其標依簡
法明真空中無實色也○初明影略釋過依簡
注文中著字已上便是顯謂初不即標一切皆問今
但云實其故何也故注通云實者著者字標之問
雖云實實也即善長起者覺者覺者白四種顯色是
空者標者實者實者實者實者實者白四種顯色是
長短等形也但是假釋得得如長對短方對圓故
氣破色顯真空二初標空有二乘破色下即○後約
破破色顯真空二乘標破色即依空三無雜破破空無
開合發色也○後釋○初釋標空二初標破 無遮
著者問空色不即其空者空則有遮障可容色在
空界之外空有遮障便是至善之者誰敢道空有遮障
○空顯下後發破即知離空色也○二釋無障礙乃
至無障礙理我自備備備其真自顯不礙更
釋○四結顯明其不離是知下四結顯其空明其不即
有即空顯明其不離是知下四結顯其空明其不即
或法家借斷空實色為隨情立破顯真空幻色之言
云云斷空中既無實色是有別即真空中豈有青

名為本識此識有三種相一著相二障相三現相初變
真次起要三現境現即六塵根身等皆時以此識變
起故云而為能變事此則明從未起來若約初相故所
說不同彼即賴耶下自有親生名者標字即賴耶也
從自種生全如來藏性隨緣成其本和合故不同也
○故今下二標真異明攝者歸本也謂初句空等歸於
能變攝攝能變攝歸於真如無相故曰真空○不
合下三問斷空前云不能現現法故不歸空也○所
言下四標斷空通初問云即空即空云斷空其故何
邪故注云隨言歸○四結二初釋釋言長者信也信
由即是其空攝成標中下句以色標體事文也故非斷
空也者結釋上句色不即非法攝成障釋者標非斷
結之釋文也○是故下後結釋言下結標中下句故
不是空者結釋上句注法可知○二微注言微也初釋
二色不即下簡實色也○二微如前可知○三釋二初以
香下釋上句空色由香等色相情執著者非是真空
之理所以標中上句空色不即空注法○初釋問因由
言色法者空色也相者計幻幻為實故○後約顯
法其簡者問上云實色此問何人情計故注云此問
平謂故凡夫執色實者自體不於空以空無開眼念
察初空者後即執色相以為真空也不簡小乘者以
小乘修無執了諸法無人方斷貪著煩惱性生空
理執法空空即礙地不執色即空故不簡也○後釋
下句空者問上云實者非真空者著者字標之問
外別有真空邪故此云實者非明也非執色故即色
為外空耳由共義故則似發問之簡小乘依其標依簡
法明真空中無實色也○初明影略釋過依簡
注文中著字已上便是顯謂初不即標一切皆問今
但云實其故何也故注通云實者著者字標之問
雖云實實也即善長起者覺者覺者白四種顯色是
空者標者實者實者實者實者實者白四種顯色是
長短等形也但是假釋得得如長對短方對圓故
氣破色顯真空二初標空有二乘破色下即○後約
破破色顯真空二乘標破色即依空三無雜破破空無
開合發色也○後釋○初釋標空二初標破 無遮
著者問空色不即其空者空則有遮障可容色在
空界之外空有遮障便是至善之者誰敢道空有遮障
○空顯下後發破即知離空色也○二釋無障礙乃
至無障礙理我自備備備其真自顯不礙更
釋○四結顯明其不離是知下四結顯其空明其不即
有即空顯明其不離是知下四結顯其空明其不即
或法家借斷空實色為隨情立破顯真空幻色之言
云云斷空中既無實色是有別即真空中豈有青

著者問空色不即其空者空則有遮障可容色在
空界之外空有遮障便是至善之者誰敢道空有遮障
○空顯下後發破即知離空色也○二釋無障礙乃
至無障礙理我自備備備其真自顯不礙更
釋○四結顯明其不離是知下四結顯其空明其不即
有即空顯明其不離是知下四結顯其空明其不即
或法家借斷空實色為隨情立破顯真空幻色之言
云云斷空中既無實色是有別即真空中豈有青
黃赤青之相也由真異異故有無別故○四結以
黃黃者結釋中下句非即下結標中上句無結標者
影在後全舉其下顯明空下及顯意云青黃赤
之真異空中尚無即此空中云何有相相○三雙簡
文四初標色不即者標實色也即空故者標斷斷空
二微可知○三釋二初釋上句以空下明其無色不
即真空釋下句簡實色也○後釋下句色無休下明
幻色不離是知下句簡斷空也不即不離方曰真空
○四結一初釋結此門二初結釋良由會色歸空者結
釋中下句空必無色者結上句也法決定而斷者既
然色相空實空中無色相也○經下引證彼標云色
空相望各有二義且以空望色論空即是相作義空
不異色是無礙空中無色是相望無色是故空中
著者取後為無礙空中無色一切相望無色者無
五種也雖者領受謂謂問為色領納為受取像為想
邊流是行一別曰識此五一且多細分共集成故標
名為識十二處者謂六根六塵是識生處故十八界者
更加六識處別故此世間有為三科是實空中何有
此邪十二日緣者無明行等法轉緣成故四諦者苦集
滅道若集者世間果因道者出世間果者苦集無
智五無得智者微塵即六度者五乘分菩提也得即
證涅槃理也上出世三科三乘修證皆實際理中各
不可得故知深淨日更從緣有故皆無自性所以無不
會歸真空○後結釋先由色空者結釋標中上句
簡實色也○後通結釋三以法者以用也此用句即
不即法則問者新空者色之情計訖○四顯理二初
顯四一標實色即無相無色即真空也○二微何以故
三釋只是下二句釋不離理以色標體真異空故以諸
下二句明不即理以有實無體真異空故以四單三
由即空中具二條簡初初二故四三即理同對道不
對道異故故標文但有一句明是顯理問何對道是
色必不與真異空顯出由云以諸色必無性故注從
緣有故者釋凡此是法也他無性者釋以諸下句
即是圓成者釋必不與真空也○四結二初顯理二
法既非減色者即初句色簡斷空也今既云色即是

三釋其下二句釋不離理以色界等處空故以諸
下二句明不即理以青黃赤白等空故以四華三
由即空中具二條分初二故四即空同對遣不
對遣異故故今釋文但有一句明是顯理問何故是
色法必不異異顯現出曰云以諸色法必無性故法
疎有故者釋凡法法也依他無性者釋以諸下二句
即是顯成者釋必不異異也○四結云初顯前已釋
法既非成色者即初句已顯前成也今既云色法
空得成也非存色者即第二句已顯前色相空
即色空故非存色也不即色者前二句簡釋不離色

者今顯理也此約顯成而非成色者緣性本空非存
色者真空無相○次三無性非成色者緣性本空非存
破存色他下釋不離以成色無性下釋上故即
真空也言過計者隨有理無如於繩上作蛇解依他
相有性無如日麻隨工匠緣而有繩相成即相無性
有如繩相本無性即麻也若了說不實即過計情以違
繩相應即依他性成即繩見麻乃圓成依現是以萬法
如幻隨目皆異顯乃不見繩蛇了法即無說法經
云無義者後一法生其一法有謂無相也即三而一
觀乎萬法同源即一而不遺二諦中道○後引言教
釋色者著者言有多釋有云色去除過計不留遺依
他空非有過計者真空之理不往相非相也有云色去
滅俗諦破空有之釋不留空滅其諸破空之計空非
有過計空空中道者就觀解色去即會歸空不留
空者明空即色空非有過計者即後二觀變存五既皆
無聞也非性不住二過相不任中道破方真真空矣
賢首云雖其俗變滅二諦常存存亡隱顯著在行心融
成一味可謂百慮已泯於智鏡萬緣不礙於靈臺優遊

法界之門自解界之境界○如色下後例諸法問
即色明空行相已如法如何故下云知色空等法注
○一結例所以以是等者問何故釋例一切法非注
出所以以是等者○引教徵成法六十空科者以
因經於阿含中例受等四為六十四空科者以
十二真如為十二四聖諦為四靜慮四無量四無
色之為三八解脫八勝處九次第定十遍處為四四念
住四正勤四神足五根五力七覺支八聖道為七三解
脫門為三三地為一五眼六神通為二佛十力四無所
畏四無所懼智慧善喜十八不共法為八無忘失法恒
住捨性為二一切智智智一切相智為三一切陀羅
尼門一切三摩地門為二須陀洹等四果為四獨善

提為一切菩薩行為一諸佛無上正等菩提提為一○
三二明結釋要者著華嚴圓宗不出六凡四聖成十
法果故淨淨無二從緣無性故云平等無二相也若例
若但淨色字為定釋行攝空證下青黃赤白等相非像

既問為三十地為一五眼六神通為二佛十力四無所
畏四無所懼智慧善喜十八不共法為八無忘失法恒
住捨性為二一切智智智一切相智為三一切陀羅
尼門一切三摩地門為二須陀洹等四果為四獨善

提為一切菩薩行為一諸佛無上正等菩提提為一○
三二明結釋要者著華嚴圓宗不出六凡四聖成十
法果故淨淨無二從緣無性故云平等無二相也若例
若但淨色字為定釋行攝空證下青黃赤白等相非像

提為一切菩薩行為一諸佛無上正等菩提提為一○
三二明結釋要者著華嚴圓宗不出六凡四聖成十
法果故淨淨無二從緣無性故云平等無二相也若例
若但淨色字為定釋行攝空證下青黃赤白等相非像

提為一切菩薩行為一諸佛無上正等菩提提為一○
三二明結釋要者著華嚴圓宗不出六凡四聖成十
法果故淨淨無二從緣無性故云平等無二相也若例
若但淨色字為定釋行攝空證下青黃赤白等相非像

影在前文○二簡釋色曰一標二徵如文三釋二文中
言以空理下初釋上句此簡釋也 然不釋下後釋下
句此釋法也○四結二乘由下初結釋上句結下下
結上○故云下後結釋即色者下句不即色者結上
句○三簡釋口一標文中上句簡釋即色者下句不即
色相下句簡釋即色者下句不即色者結上
此有二意所以故釋上句云不即色者下句不即
色○一釋二初釋上句云不即色者此明真空是妙
有不空之體為知有之所以非依他之色相故簡
實色也○初對前會釋對空中無色故不即空注

絕無情○次引教證如文可見○後會通前門唯第三
下非寂寂者謂前第三句良言色歸空中必
無色此合云明空即色中必無空却空是阿依非
依依故然但不相對義相和相故云義必不異至文
當示其結文相一翻於初句用為觀心無聞也○後
別釋口初簡釋空○初釋二徵如文○新空下初釋上
句也釋釋中上句空不即色者云應釋時或異於色下
故云非色對上上句不即色故此簡釋也○後釋下
句者釋釋中下句以空即色故故云不異色者
異於色也何謂依他即色對上上句以色釋即是色者
故云不即色者此釋法也○四結要旨真空即是結
釋中下句故今新空不即色者結釋中上句無結釋者

此有二意所以故釋上句云不即色者下句不即
色○一釋二初釋上句云不即色者此明真空是妙
有不空之體為知有之所以非依他之色相故簡
實色也○初對前會釋對空中無色故不即空注

此有二意所以故釋上句云不即色者下句不即
色○一釋二初釋上句云不即色者此明真空是妙
有不空之體為知有之所以非依他之色相故簡
實色也○初對前會釋對空中無色故不即空注

此有二意所以故釋上句云不即色者下句不即
色○一釋二初釋上句云不即色者此明真空是妙
有不空之體為知有之所以非依他之色相故簡
實色也○初對前會釋對空中無色故不即空注

此有二意所以故釋上句云不即色者下句不即
色○一釋二初釋上句云不即色者此明真空是妙
有不空之體為知有之所以非依他之色相故簡
實色也○初對前會釋對空中無色故不即空注

此有二意所以故釋上句云不即色者下句不即
色○一釋二初釋上句云不即色者此明真空是妙
有不空之體為知有之所以非依他之色相故簡
實色也○初對前會釋對空中無色故不即空注

此有二意所以故釋上句云不即色者下句不即
色○一釋二初釋上句云不即色者此明真空是妙
有不空之體為知有之所以非依他之色相故簡
實色也○初對前會釋對空中無色故不即空注

句此釋法也○四結二乘由下初結釋上句結下下
結上○故云下後結釋即色者下句不即色者結上
句○三簡釋口一標文中上句簡釋即色者下句不即
色相下句簡釋即色者下句不即色者結上
此有二意所以故釋上句云不即色者下句不即
色○一釋二初釋上句云不即色者此明真空是妙
有不空之體為知有之所以非依他之色相故簡
實色也○初對前會釋對空中無色故不即空注

此有二意所以故釋上句云不即色者下句不即
色○一釋二初釋上句云不即色者此明真空是妙
有不空之體為知有之所以非依他之色相故簡
實色也○初對前會釋對空中無色故不即空注

此有二意所以故釋上句云不即色者下句不即
色○一釋二初釋上句云不即色者此明真空是妙
有不空之體為知有之所以非依他之色相故簡
實色也○初對前會釋對空中無色故不即空注

此有二意所以故釋上句云不即色者下句不即
色○一釋二初釋上句云不即色者此明真空是妙
有不空之體為知有之所以非依他之色相故簡
實色也○初對前會釋對空中無色故不即空注

此有二意所以故釋上句云不即色者下句不即
色○一釋二初釋上句云不即色者此明真空是妙
有不空之體為知有之所以非依他之色相故簡
實色也○初對前會釋對空中無色故不即空注

此有二意所以故釋上句云不即色者下句不即
色○一釋二初釋上句云不即色者此明真空是妙
有不空之體為知有之所以非依他之色相故簡
實色也○初對前會釋對空中無色故不即空注

此有二意所以故釋上句云不即色者下句不即
色○一釋二初釋上句云不即色者此明真空是妙
有不空之體為知有之所以非依他之色相故簡
實色也○初對前會釋對空中無色故不即空注

此有二意所以故釋上句云不即色者下句不即
色○一釋二初釋上句云不即色者此明真空是妙
有不空之體為知有之所以非依他之色相故簡
實色也○初對前會釋對空中無色故不即空注

經云是故空中無色受等理絕者未見現色受等明
珠也故注中及明文絕者不見聖教說色中無空之文
○四結二初先結當句二初結釋言是所依故即色
者結釋中上句顯即中不即顯色也是所依故即色
色者顯不即中即也結釋中下句顯斷空也○後結釋
由不即色者結釋中上句故即色也者結釋中下句注
以義結釋者用即不即義結釋文○後通結前三言
以法簡情者真空即不即法則簡去斷空青色之精
計已訖○後解二初心顯曰一釋四空即是色者精
顯解也○二微可知○三釋謂足現智所照真空必
不真於緣生性故標云空即空色因何自由真空
必不真色故下云以是等法無我者謂色心等緣無
體故云無我此法空也不言入空者以勝該功故謂二
乘了入空時不真法空甚難了法空時必無入空也此
則二無我為能顯現為所顯故注云即真空體也字謂
真空即理法界上有簡情之用攝用顯體故云即真空
體也即理法界故此約所觀緣理此非斷滅故者
明不壞色相即法無我所顯真如若諸法即成新滅
法真如不守自性者是通緣義由通緣即色故非斷滅
此舉隨緣空斷情非理事無關○四結知文○後結
例文中注言前例者指在會色顯空觀中也若例
者應云一空不即欲想行識等二句云空理非顯納亦
像遮深了解者善例謂佛云一空不即欲佛等二句云
以空理非神道光明等也

華嚴法界觀通玄記卷上

華嚴法界觀通玄記卷中



華嚴法界觀通玄記卷中
東家東門山釋教行大師 木高 集
○三空色無礙觀一初標二第三空色無礙觀者謂觀
色即空時空即色觀空即色觀空即色觀空即色觀空即色
聖人隨有隨空隨空無不有有非空兩語一
會二義雙通約能觀之智有無礙約所觀之境雙通
雙融空色無礙二而不二為一味法然一觀融二
門各第四句顯理顯空色二法同時無礙成立通行
之無礙第十門心統一加方式正行即空觀智也○
初釋切顯真法雖有事間提顯云空觀何故云
空色無礙耶故注云雖有事此絕也本意下奪也以色
下出所以虛名者無得物之功虛相者無常名之謂名
下無物物上無名名無常故無礙空之體故經云相
名常相隨俱生諸法無前二句八門諸名相安想此
後一門是顯正智分故云意在此故○次約文釋義
後結顯名顯知文可○次釋二初色不礙空空色之
體皆無性本空故云色盡而空現者知色止而真空顯
也上句盡字是釋經義下句盡字止顯經義色止非
滅壞也色本無故○次空不礙色色盡而空全盡者
若盡者有真空不即幻色也前云空是此云不真言殊
意一空不礙者今云色存而空隱與上相對全言空
不礙者為成真空觀故此則空非空不礙也非色非
色不礙空非空蓋色空所以色即空空為色所以
空即色色色相如幻真空自顯故云空不礙也○後約
法通釋三初辨開注色空者開文云別色盡而空現
何所以故觀出自云謂色盡體後句為開亦然○次
正釋謂若下及明今說下屬標可知○後當舉注色
不礙者正對於空不礙也然不如無礙者在色盡以成
觀後開序云直於文開要之下注之今此一門何故
難而注耶於真空不礙幻色幻色不礙真空唯一味耳
善隨文注之意觀色空相即之文故觀文別之於前注
文釋之於後注作者之妙也○後約人結顯定故下約
入顯法以是色即空或有色無不見空一味也由空
即色故顯空真非見者一味也故古德云欲言其有
水珠故難以難求欲言其無離印森羅而顯離印雙
存唯一真境故云一味定之可見者結歸觀心將此文
義及照自心不見心故云思之可見○四成然無事
三初標第四句顯絕無言說者謂諸法不亂之聲四者
神前之數說謂過滅滅其情絕絕止絕其辭心無

文釋之於後復作者之妙也○後約人結東放下的
人顯法以是色即空者色無不見空一味也由空
即色故觀空莫非見者一味也故古德不欲言其有
水珠玻璃以難表空言無海即森羅而現雖曰雙
存唯一真境故云一味思之可見者皆隨觀心將此文
義及眼自心不見心故云思之可見○四滅絕無
三初標第四滅絕無者謂諸法不離之解曰
增前二數滅絕無者謂諸法不離之解曰
今此門中二俱不立形對變絕無智兩亡動寂俱盡
心絕律都無所寄餘無二因以名云○初釋後科
簡中顯了法○不可言者指下不可言語○後釋二
初正釋此經○二初明深義○一拂明空即色文中言謂
此所謂真空不可言即色者謂明空即色第四門中
是色之語也深義者即色者謂色即空之義謂
實言之深故須進此理應同凡見空色者有人有二
約法亦有二過謂聖凡相礙約人也○二過正無約法也
者同凡見見空色者謂色即空之義謂色即空之義
凡應同聖見真空者謂色即空之義謂色即空之義
同聖人見真空也若聖凡凡混於聖則佛佛何言
凡混真與不即色者佛者之門也謂佛佛何言
空云不即隨文執句不離止於空像故此拂之今謂真
境也注云空者不即者雖是實色之義深義謂空之見
故云不可言不即色謂空者不即色者就人亦有三過
見色外空無由成於空智者以取色外空非真空故一
聖智不成過也以聖人見色法即空故凡空空未創
聖者以空異色重有聖故二聖不從凡得過也又凡夫
見色異色依不成深義謂佛依真空無別色故由法而

見色為凡俗色即空或應非未列也○二辨實色
歸空又不可言即空者應云謂此所說幻色不可言
即空者拂前初釋第四門也法者即空者有三過謂
凡迷空色時應同聖智見真空也此凡聖過法注云
又亦失於二過謂二諦五無過過法注以青字
即空失於二過謂此以青字為真空則無空失於其
諦也問前注中何以見聖智辨此文何說就凡說空
真從其聖智所證空色乃凡夫所迷聖人悟真定後更
不同凡夫見空於前凡聖對辨此中惟凡凡論後
以凡真定是謂聖智空色相即聖凡凡見色混同
聖智見空故此佛說凡說又不即空者謂前三句色不
即空也注者不即空者亦有二過一不迷真過謂色
在空外應凡夫見色不迷真何故深論說凡夫
迷於真定見空色以為實色也又凡下二凡夫未
不成聖過既見空色長隔真空之外即凡夫永無成佛
之期上注中推十一種過未前一句中語達也○三

不同凡夫見空於前凡聖對辨此中惟凡凡論後
以凡真定是謂聖智空色相即聖凡凡見色混同
聖智見空故此佛說凡說又不即空者謂前三句色不
即空也注者不即空者亦有二過一不迷真過謂色
在空外應凡夫見色不迷真何故深論說凡夫
迷於真定見空色以為實色也又凡下二凡夫未
不成聖過既見空色長隔真空之外即凡夫永無成佛
之期上注中推十一種過未前一句中語達也○三

唯其即解心但緣空境為境不惟到離相真境也○
後行即是境者以境其境界分齊之義能若深遠行
到此方自至極之分齊若存心器融散為至極或可
稱法界境起之行名即境說清淨非真流之行

境不二之行境與即心無二之境境都亡法界自顯
境謂不知鳥故大疏云即心之境界之佛即境也唯
心如來心境重而不覺性一即斯意也○心遠智解
止取相之知也唯行惟到者離相之行非對故非解

境者即解心但緣空境為境不惟到離相真境也○
後行即是境者以境其境界分齊之義能若深遠行
到此方自至極之分齊若存心器融散為至極或可
稱法界境起之行名即境說清淨非真流之行

境不二之行境與即心無二之境境都亡法界自顯
境謂不知鳥故大疏云即心之境界之佛即境也唯
心如來心境重而不覺性一即斯意也○心遠智解
止取相之知也唯行惟到者離相之行非對故非解

境者即解心但緣空境為境不惟到離相真境也○
後行即是境者以境其境界分齊之義能若深遠行
到此方自至極之分齊若存心器融散為至極或可
稱法界境起之行名即境說清淨非真流之行

結上條爲事空而過法界也者事法空故有用時以
全過理也結上過理二空問一應過理可知自餘下法
如何故云云一應外空全過理多事法空全過理也
此上一二問五期全過文意極難故特約云法空之全觀

智明理問門無特別合可有之答有二意一者前門
既云一織塵尚必尚問諸法此云一塵不壞故須例
也二者此二門是相連一則故此通結二門全則一過
例多過前則通一則過多是故前門約法用皆空
而萬行諸法此門即月見律皆有而一過清淨方名寂
照雙融無關觀智也雖有後之八門在不離於此也

二款深二初過法收海爲波故一或即一門深過理
全過事如海滿波收海爲波故一或即一門深過理
全過事如波過波故一切都不成也起情者前門已
簡故雖見者尚不結又起觀起新空色色之情難
能一兩証之見全起理事大小之情難休用一異之見
後觀起定一空多之情難先後同時之見若不知是何

云入門生智非結云見者即是若彼則無所見諸佛離
即見是故見清淨也初明起情注云一塵即無法分
若成事即休空故不壞事相而全過理也今即無分故
起理何曾過連相即無相何曾可當情耶故云不
可以識也次明離見理全在應中若不變即隨緣
故無相全在相中即前理過事何五眼而可親者五

眼即事法界五眼者一肉眼見障內近色二天眼見障
外遠色三慧眼緣空四法眼觀悟五佛眼望有覺照此
事法全依理既真理全在應中諸流眼觀三智故
肉天法三眼後得智慧眼除眼不覺眼眼眼中道智
故云不可以智知也後會果本可知後會論不全

非世論下此况不及也初引經釋律注引大經半
得滿成三業者欲界色界色無有過諸色二界外
色俱有無著無色界色俱無有無過諸法法眼
喻此全過法也此則無物而可喻分後後明諸言此
自語故者察前云此二句後後後後後後後後後後
故科云分喻前三句二約法對對下問以舉海波

爲喻前後相連如何會通前論法依非世論喻况
此約義相故海波法相得故無過法又簡有二意
一簡海波不准全論事相連二簡世人不能見大海
全在一波中然若大難事相連以通之文易意難
故釋文而會若文意易易故但清元而已文意俱難
故舉喻以況之既無餘而可喻故舉喻者其全而

通之意理不得以世論情見喻中主經者諸達七目小
見大意宜慎可故云世人見見等也以等者云雖以
海論理喻事海難寬廣猶存意等能全論法非故
本出意也以海指理喻寬廣故指事非差別

一簡海波不能全論事相連二簡世人不能見大海
全在一波中然若大難事相連以通之文易意難
故釋文而會若文意易易故但清元而已文意俱難
故舉喻以況之既無餘而可喻故舉喻者其全而
通之意理不得以世論情見喻中主經者諸達七目小
見大意宜慎可故云世人見見等也以等者云雖以
海論理喻事海難寬廣猶存意等能全論法非故
本出意也以海指理喻寬廣故指事非差別

一簡海波不能全論事相連二簡世人不能見大海
全在一波中然若大難事相連以通之文易意難
故釋文而會若文意易易故但清元而已文意俱難
故舉喻以況之既無餘而可喻故舉喻者其全而
通之意理不得以世論情見喻中主經者諸達七目小
見大意宜慎可故云世人見見等也以等者云雖以
海論理喻事海難寬廣猶存意等能全論法非故
本出意也以海指理喻寬廣故指事非差別

通之意理不得以世論情見喻中主經者諸達七目小
見大意宜慎可故云世人見見等也以等者云雖以
海論理喻事海難寬廣猶存意等能全論法非故
本出意也以海指理喻寬廣故指事非差別

非世論況下下分論非全論事相連三節文意相
對一波一波對海論理一事一事對理明大小無關
一理明一事多事二事多事對一理明諸法與理互
理明一事多事二事多事對一理明諸法與理互

理明一事多事二事多事對一理明諸法與理互
理明一事多事二事多事對一理明諸法與理互
理明一事多事二事多事對一理明諸法與理互

理明一事多事二事多事對一理明諸法與理互
理明一事多事二事多事對一理明諸法與理互
理明一事多事二事多事對一理明諸法與理互

理明一事多事二事多事對一理明諸法與理互
理明一事多事二事多事對一理明諸法與理互
理明一事多事二事多事對一理明諸法與理互

理明一事多事二事多事對一理明諸法與理互
理明一事多事二事多事對一理明諸法與理互
理明一事多事二事多事對一理明諸法與理互

理明一事多事二事多事對一理明諸法與理互
理明一事多事二事多事對一理明諸法與理互
理明一事多事二事多事對一理明諸法與理互

理明一事多事二事多事對一理明諸法與理互
理明一事多事二事多事對一理明諸法與理互
理明一事多事二事多事對一理明諸法與理互

全過於諸波皆有隨緣故問同諸波而異也亦而隨
非異有不安自體成故又問何故不隨波而異用前
法答海無一故此合理性雖隨緣過一切事法不同
切事法之多理即是一故云非異保持多而於大海者

無礙外波也者保持者與前一波無先後故問何故各
而大海前注云而問海故又問既同於海而問海而一
那卷而波非一有成事義故又問何故非一用前注答
不壞相故此論多事法空同異性而差別之相違
故云非一也法指在下文可知矣非異非多義
下文非異是無別象也三諸法各各全過大海下

全過大海空理事全明過也又者即前論海波性
全過大海空理事全明過也又者即前論海波性
全過大海空理事全明過也又者即前論海波性

全過大海空理事全明過也又者即前論海波性
全過大海空理事全明過也又者即前論海波性
全過大海空理事全明過也又者即前論海波性

全過大海空理事全明過也又者即前論海波性
全過大海空理事全明過也又者即前論海波性
全過大海空理事全明過也又者即前論海波性

全過大海空理事全明過也又者即前論海波性
全過大海空理事全明過也又者即前論海波性
全過大海空理事全明過也又者即前論海波性

全過大海空理事全明過也又者即前論海波性
全過大海空理事全明過也又者即前論海波性
全過大海空理事全明過也又者即前論海波性

全過大海空理事全明過也又者即前論海波性
全過大海空理事全明過也又者即前論海波性
全過大海空理事全明過也又者即前論海波性

全過大海空理事全明過也又者即前論海波性
全過大海空理事全明過也又者即前論海波性
全過大海空理事全明過也又者即前論海波性

立正大学
図書館蔵 明版仏典解題目録

平成十一年三月二十五日発行

編集・発行 立正大学図書館

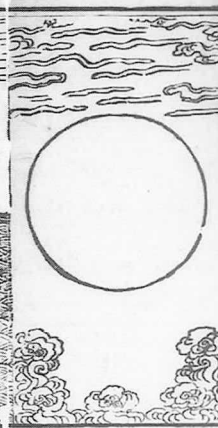
〒141-8602 東京都品川区大崎四丁目一六

印刷・製本 株式会社 東プリ

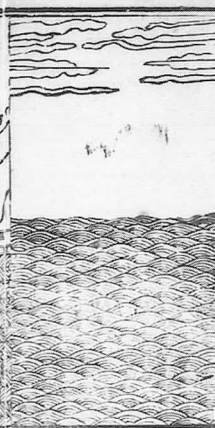
〒144-0052 東京都大田区蒲田四丁目一



全長清此
禁閉所官
發起大事
而看東生
于今受賜



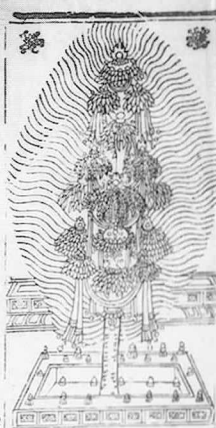
第一日觀
落日懸
出生死路
十二時中
誓念一塵



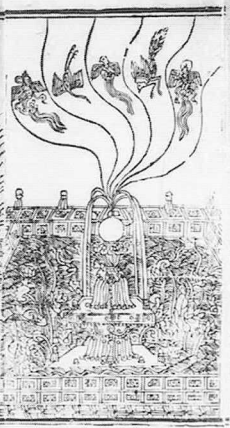
第二天觀
大水澄清
照照水結
至瑠璃地
月外映徹



第三地觀
玩瑠璃上
紅霞來拍
了見分明
除障障障



第四地觀
行樹一重
珠網華宮
清淨無布
妙好殊窮



第五地觀
八地德水
之雲妙色
蓮開鳥鳴
洗除煩惱



第六地觀
樓中天界